

徳島藩の測量家・岡崎三蔵と 分間絵図の世界

羽山 久男(徳島地理学会)

本講座の目的

1. 近世後期には実測に基づく精度の高い絵図が徳島藩で作製された⇒絵図作製先進藩(徳島・熊本・佐賀・萩・鳥取・金沢藩)
2. 正確な実測図である分間絵図(村絵図・郡図・国絵図)を完成させた阿波の測量家・岡崎三蔵父子。
3. 約50年(1800～50年)かけて阿波淡路約860ヶ村を測量⇒分間村絵図作製。
4. 分間村・郡・国絵図で近世後期の阿波・淡路の歴史を読む。
5. 分間絵図で精密に復原できる近世後期の阿波・淡路の村や町の自然・文化景観、生活空間

1. 近世後期に実測に基づく驚くほど正確な阿波・淡路両国の国・郡・村分間絵図を作製した徳島藩の天文方(絵図方)岡崎三蔵父子

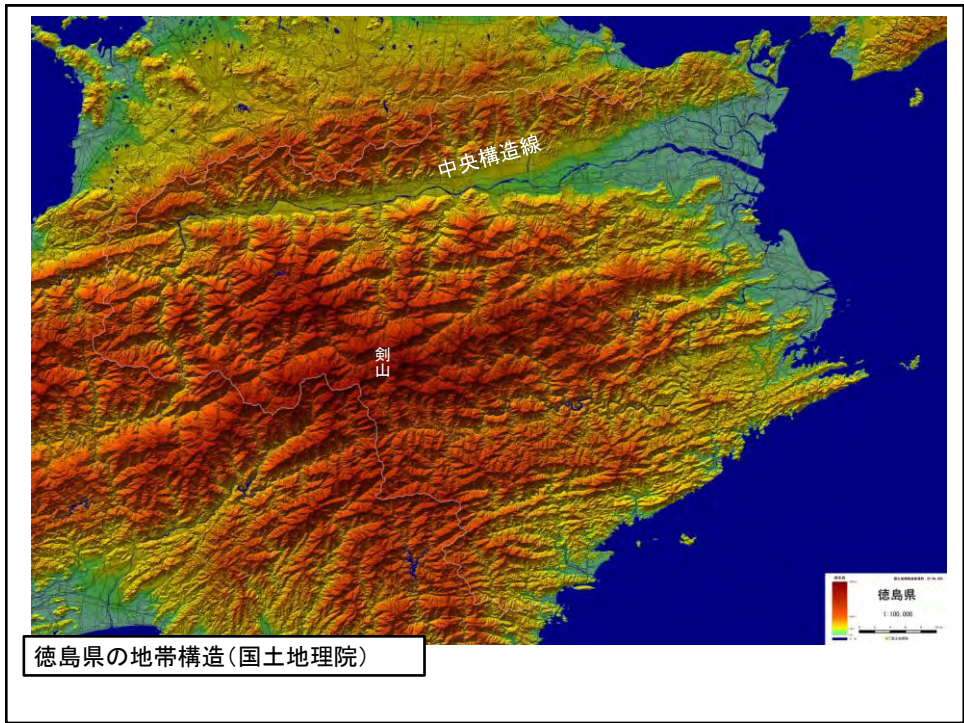
(1) 享和～嘉永期(1801～53)⇒約50年間⇒藩挙げての絵図作製事業⇒阿淡両国約148ヶ村(17%・約171点の分間村絵図が現存(2018年現在)

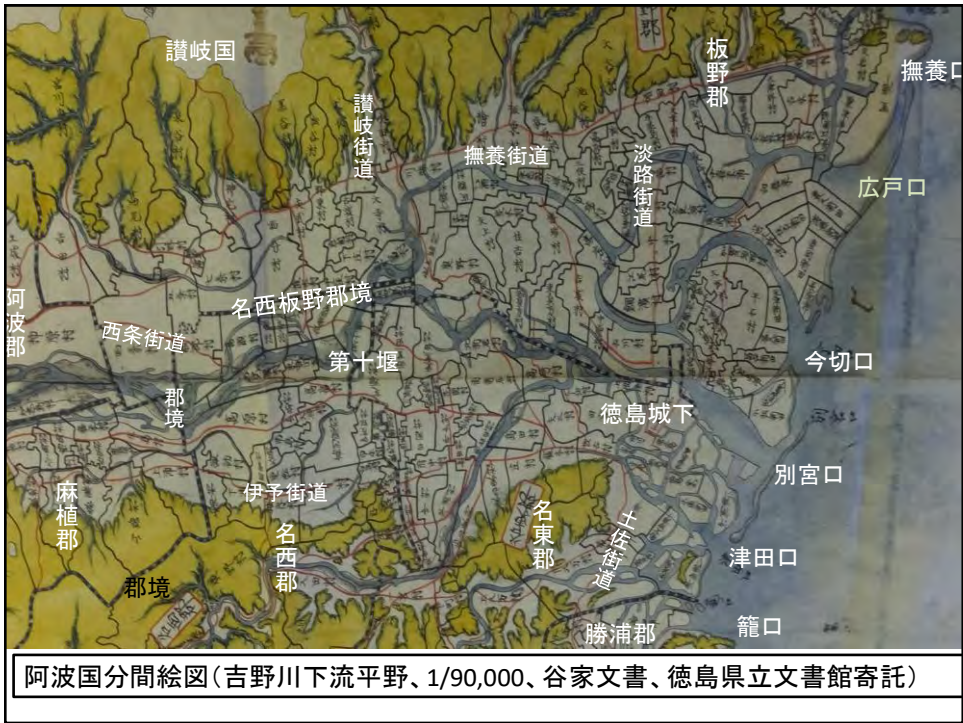
(2) 阿波国約600ヶ村+淡路国約260ヶ村⇒約860ヶ村を実測⇒縮尺1,800分の1(絵図面2寸:1町)

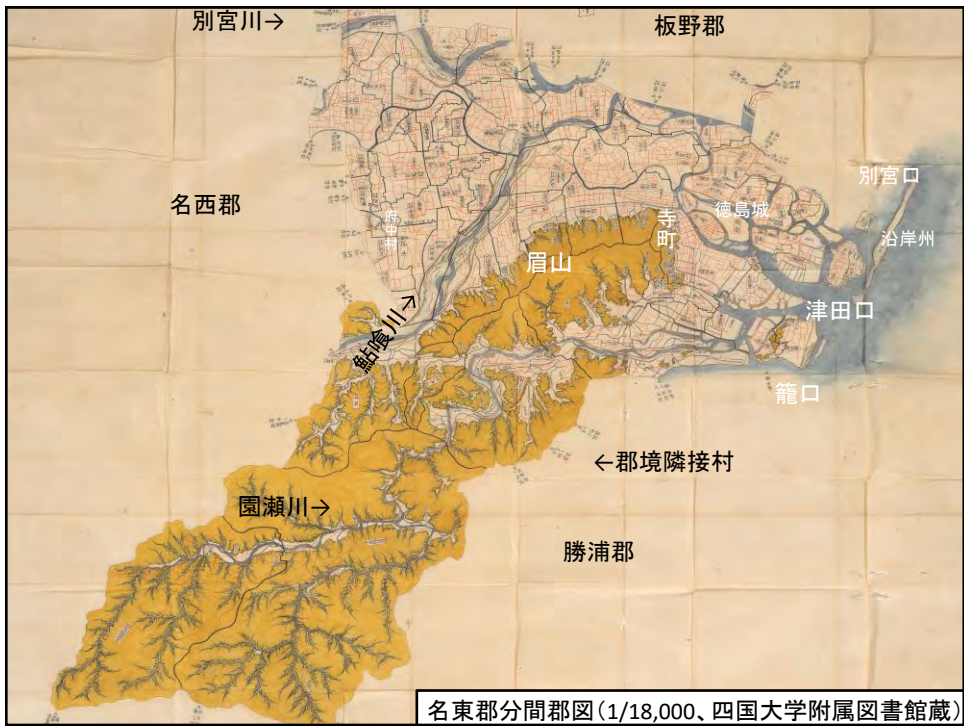
(3) 分間村絵図から分間郡図(縮尺18,000分の1、絵図面2分:1町)を編集⇒阿淡12郡の内、阿波国三好郡・海部郡を除く10郡現存(約16点)

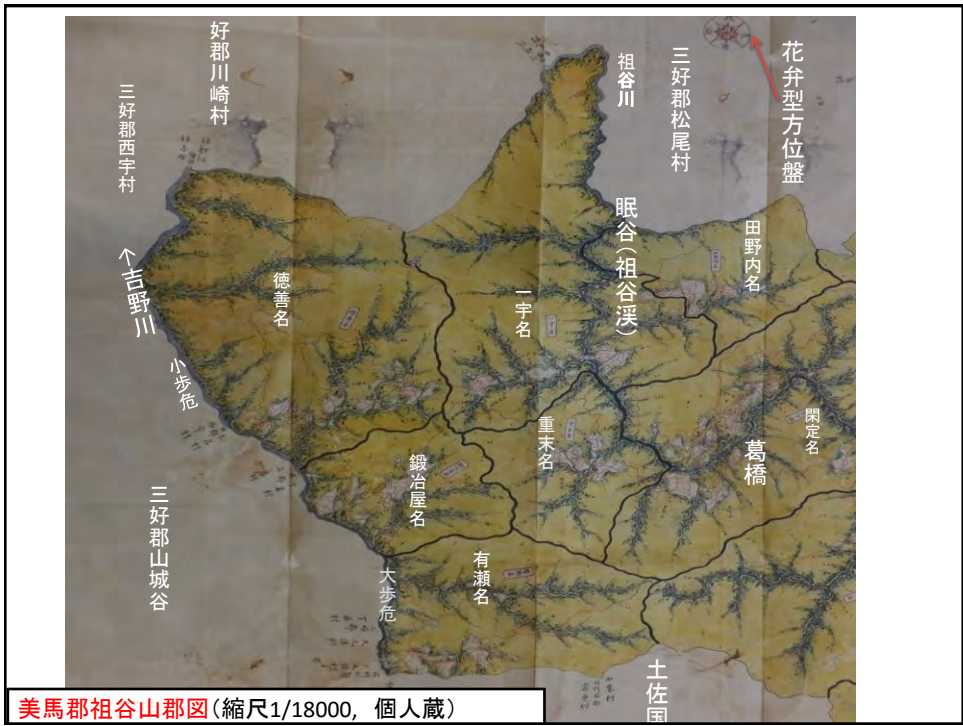
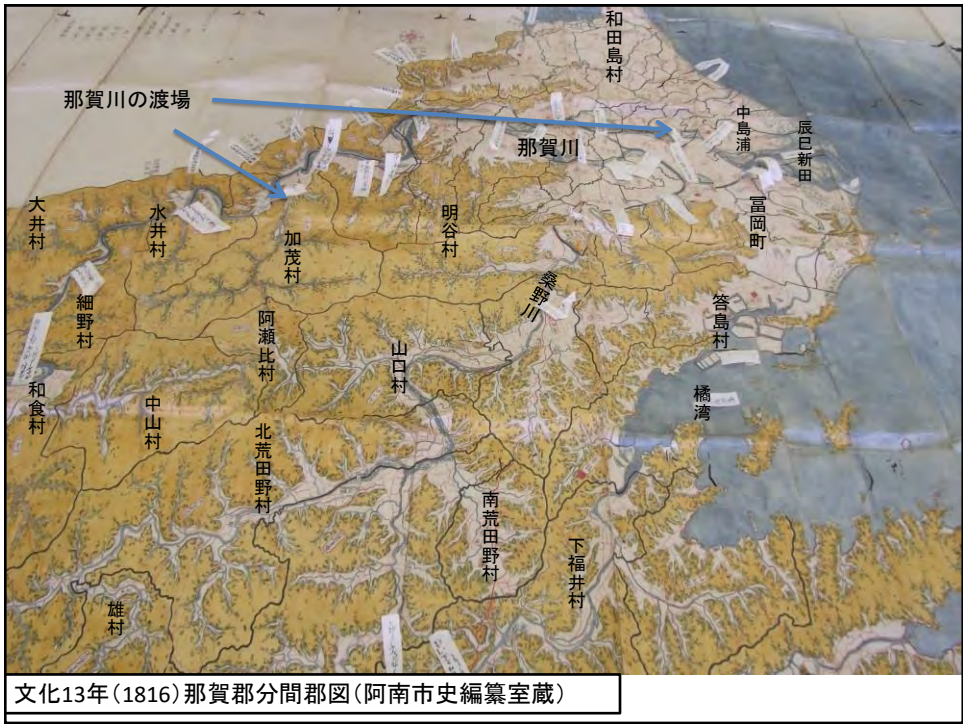
(4) 分間郡図を編集⇒分間国絵図(縮尺4.5万分の1=2寸:1里。9万分の1=2寸:50丁)現存約12点

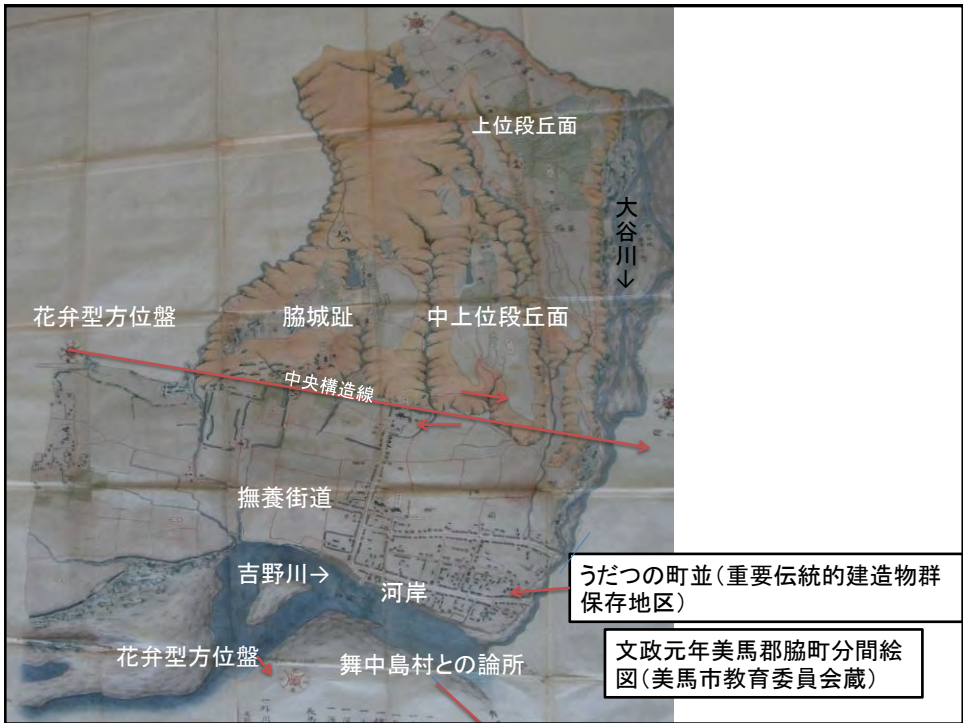


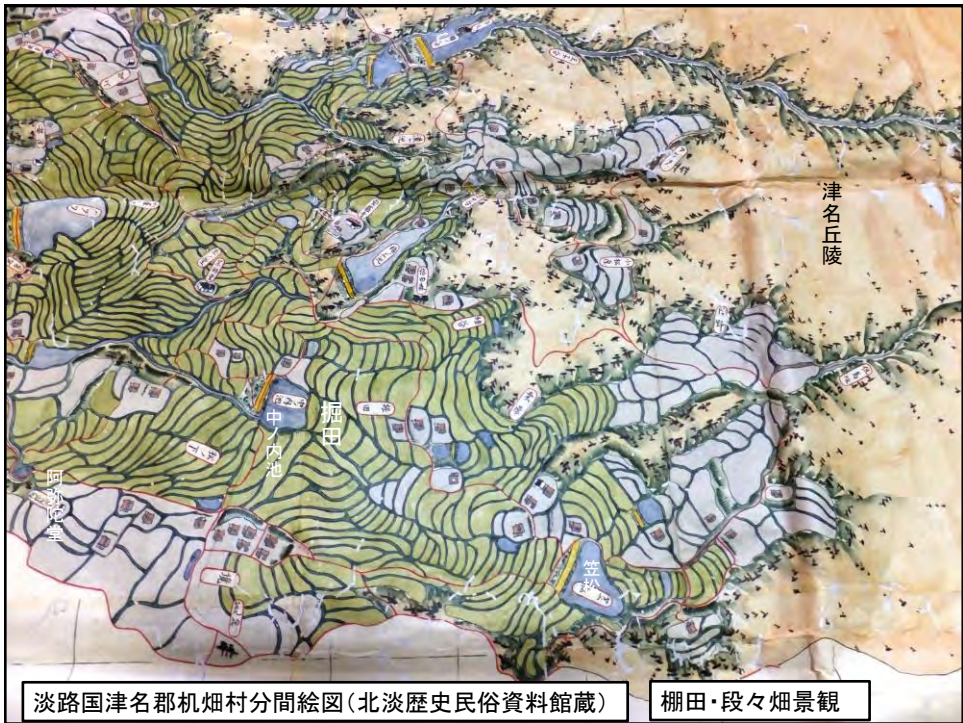
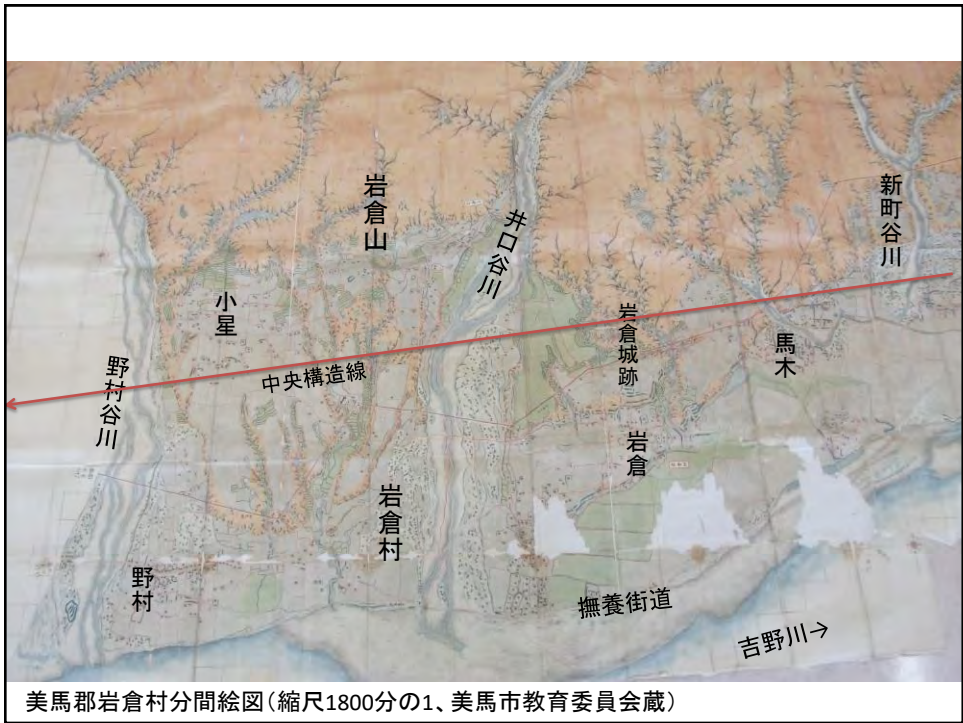












1. 実測に基づく精密な分間絵図を作製した阿波の測量家・絵図巧者岡崎三蔵の実像

- 1) 享和(1802)～嘉永期(1849)における徳島藩の実測分間絵作製事業→藩政文書・測量記録等はほとんど現存しない
- 2) 藩天文方岡崎家の事績の記録に関する定説や過去の研究史の再検討をする必要あり
- 3) 岡崎三蔵宜陳(4代)・夫左衛門宜平(5代)が作製した阿波・淡路の現存する実測分間絵図の原図(控・写図)等を空中写真等との比較
- 4) 岡崎三蔵宜陳著(稿本、寛政11年<1799>)『南阿測地法 一～七巻』から岡崎家測量術を紹介

2. 近世後期の先進藩における実測村絵図の作製

- 1) 熊本藩(享和～嘉永期)藩天文方、池部長十郎・啓太父子、「手永図」、縮尺1/6,000～1/14,000
- 2) 佐賀藩(天明～嘉永期)作製者不詳、「郷村図」、1/600
- 3) 萩藩(享保～天保期)藩絵図方頭井上武兵衛・有馬喜惣太、「一村限明細絵図」、1/3,600
- 4) 鳥取藩(文化～弘化期)側用人郡代加藤主馬・在吟味銀役磯岩文次郎・野間鹿蔵、「田畑地続全図」、1/600
- 5) 金沢藩(寛政～天保期)越中射水郡高木村十村・郡縄張役石黒信由、「内検地領絵図」、1/1,200～1/2,000
- 6) 徳島藩(享和～嘉永期):1/1,800、の藩天文方4代岡崎三蔵陳(のりぶ)、5代夫左衛門宜平(のりひら)、1/1,800
- 7) 熊本・佐賀・萩・鳥取・金沢藩は地方改革の一環として村絵図が作製されたが、徳島藩の場合は明確な目的なし

3. 徳島藩の分間絵図作製事業

- 1) 明治40年(1907)『阿淡御両国絵図面』(稿本、徳島県立図書館蔵)
- 2) 寛政9年(1797)岡崎三蔵宜陳→藩天文方命ぜられる
- 3) 測量法・製図法: 清水流派の規矩術とされるが→樋口権右衛門(長崎)の系統で、清水流ではない文村井昌弘『量地指南』(享保18年/1733)、寛政9年/1797)影響大と考える
- 4) 享和2年(1802)撫養より測量開始。
- 5) 文化5年(1808)3月4日~4月19日、第6次伊能忠敬測量隊(撫養~穴喰)に夫左衛門宜平を助手として潜入させる→伊能の測量術は徳島藩と同水準→測量器具高い精度(小放儀・軸心磁石台=強盗式磁石台に注目)
- 6) 文化5年「徳島御山下分間絵図」(文化8年完成、1/3,600)
- 7) 天保2年(1831)阿波国絵図完成、*文政11年(1828)「阿波御国絵図」(1/90,000)
- 8) 天保3年(1832)岡崎夫左衛門宜平、淡路国絵図作製命ぜられる→弘化4年完成(嘉永2年・明治3年の図あり)

4. 徳島藩の分間絵図の縮尺

- 1) 分間村絵図=絵図面2寸1町=縮尺1/1,800、6尺1間、60間1町、50町1里、村の外周計測(積数)、測量基準点からの山の直立高(町間数)を明示、村境の確定、廻り検地
- 2) 分間村絵図より編集→分間郡図(絵図面2分1町、1/18,000)
- 3) 分間郡図より編集→分間国図(絵図面8厘1町、1/45,000、絵図面2寸50町(1里)1/90,000=文政11年)
- 4) 精密な測量に基づく分間村図→分間郡図→分間国図のプロセスで実測図を作製したのは徳島藩のみ(平井2014)
- 5) 石黒信由、海岸・街道筋の測量で郡図作製→加賀・越中・能登国図→加越能三州図。

5. 徳島藩分間絵図の精度

- 1) 平井松午(2014)→那賀郡岩脇村分間絵図+文化10年勝浦郡檜原村・久保村・野尻村・田野々村分間絵図の精度検証(GISソフト、ジオリファイン機能による補正)→誤差3.42~5.17%(「実測分間絵図に関するGIS分析」平井他編著『近世測量絵図のGIS分析-その地域的展開-』)
- 2) 羽山久男(2017)→徳島藩作製の文化~天保期阿波淡路両国の分間村・郡図・国図内51点の距離と方位の精度検証
- 3) 昭和30~40年代撮影の空中写真(縮尺1/5,000程度)・都市計画図・自治体全図、2.5万分に1旧版地形図、2.5万分の1・5万分の1地形図との比較
- 4) 絵図と比較図(1点につき約15~20地点間)との南北・東西・対角線距離と方位の比較

6. 精度検証結果(極めて高い)

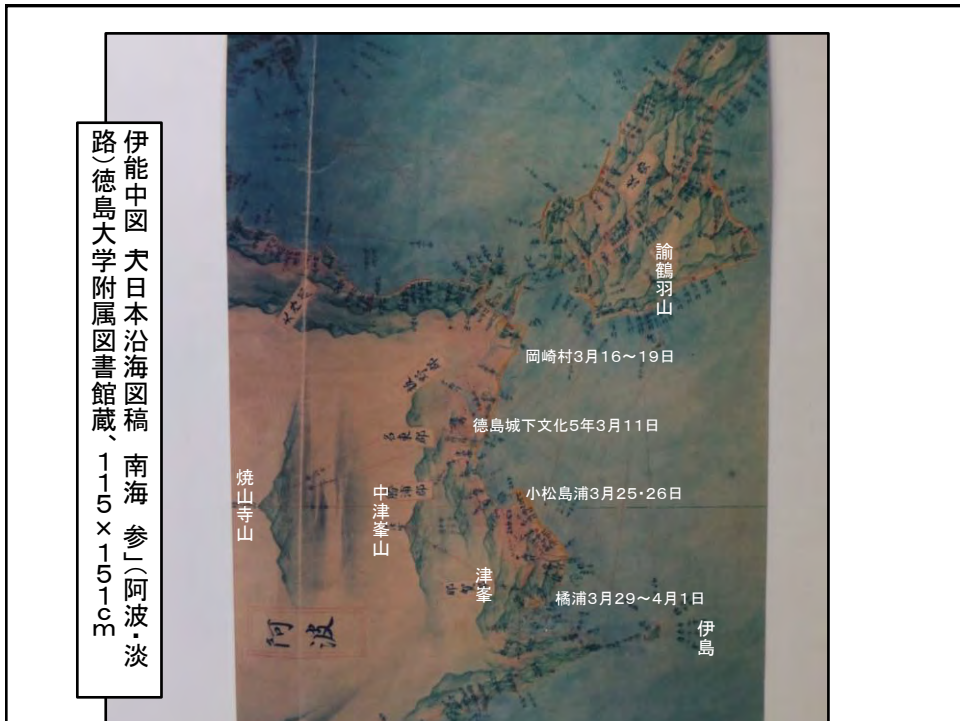
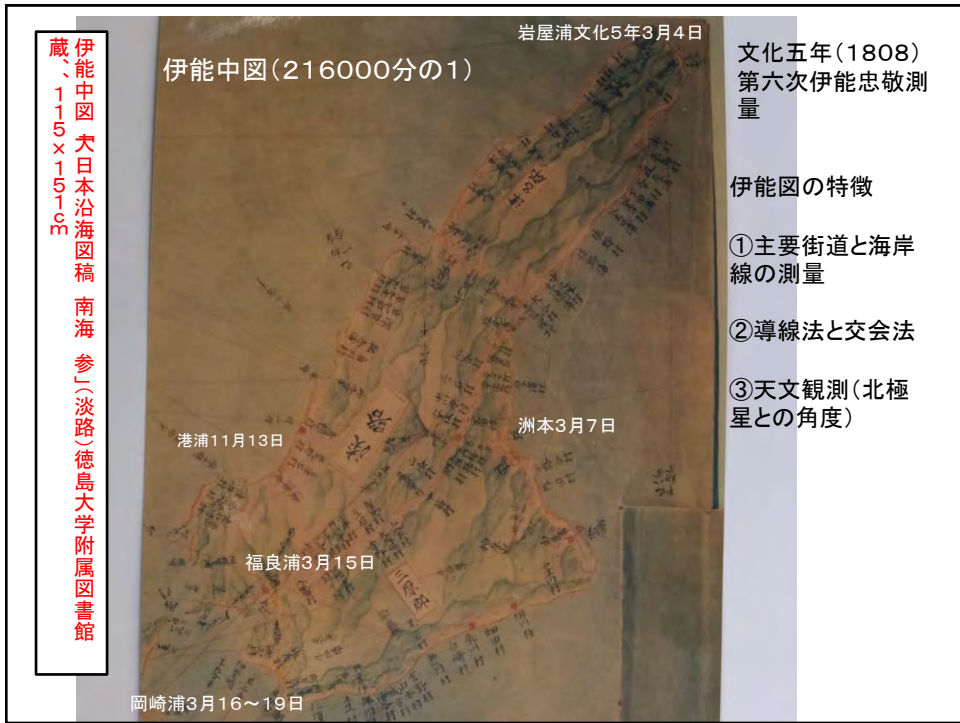
- 1) 阿波国内村絵図(24点): 南北・東西・対角線0.22~9.97%(最大値)、方位0度~7度
- 2) 淡路国内分間村図(9点): 南北・東西・対角線0.20~7.81%(最大値)、方位0度~6度
- 3) 阿波国内郡図(9点): 南北・東西・対角線0.14~8.81%(最大値)、方位1度~4度
- 4) 淡路国内郡図(2点): 南北・東西・対角線0.37~6.86%(最大値)、方位2度~3度
- 5) 阿波国図(6点): 南北・東西・対角線0.23~6.43%(最大値)、方位1度~5度
- 6) 淡路国図(2点): 南北・東西・対角線0.28~2.77%(最大値)、方位0度~3度
- 7) 鳥取藩文政期郡図誤差10%程度(塚本2014)

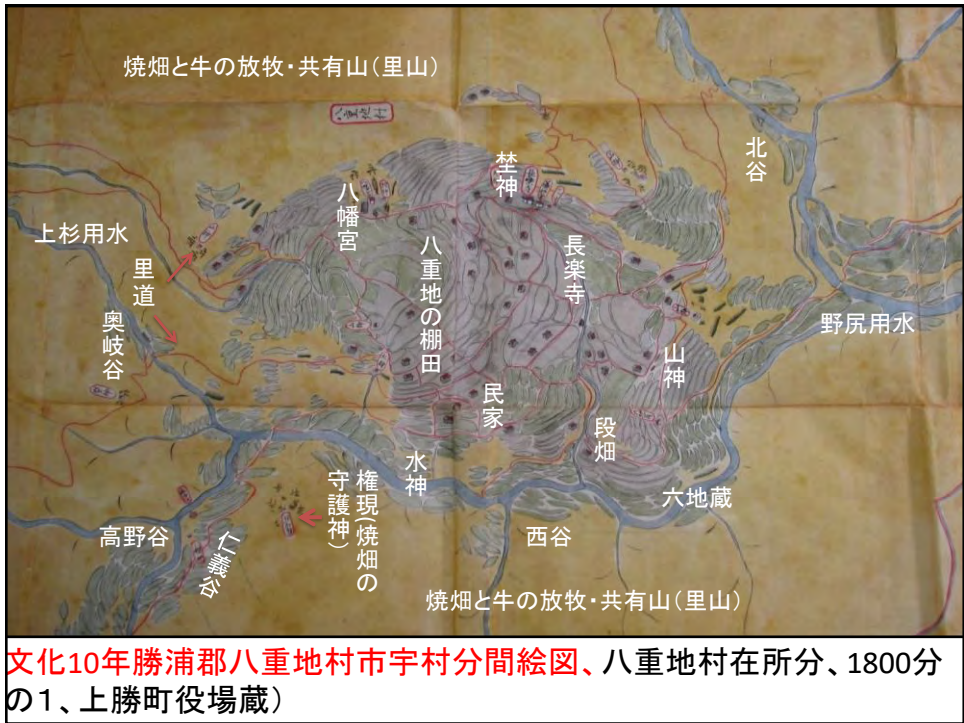
7. 徳島藩分間絵図の作製目的・資料的意義

- 1) 作製目的→**行政基本図**としての機能
- 2) **村・郡境の確定、他村の飛地・論所の明示**
- 3) **村・郡境・街道・道筋だけでなく内部空間を実測**
- 4) **絵画的表現ではなく、平面的に山地と平地等の地形区分**
→**近代測量地図のさきがけ**
- 5) **土地利用区分**→**田・地面畠（畑）・荒地・藪・草渡地**
(採草地)
- 6) **微細な村落景観・生活空間（民家）・寺社・小祠等の宗教的景観**の空間的構造
- 7) **主なランドマーク**（一里松・制札場・主な社寺）
- 8) **絵図資料のみならず、総合的な歴史資料としての意義**→**地域史との関連、地方文書との摺り合わせ**→**村落の空間・社会構造**

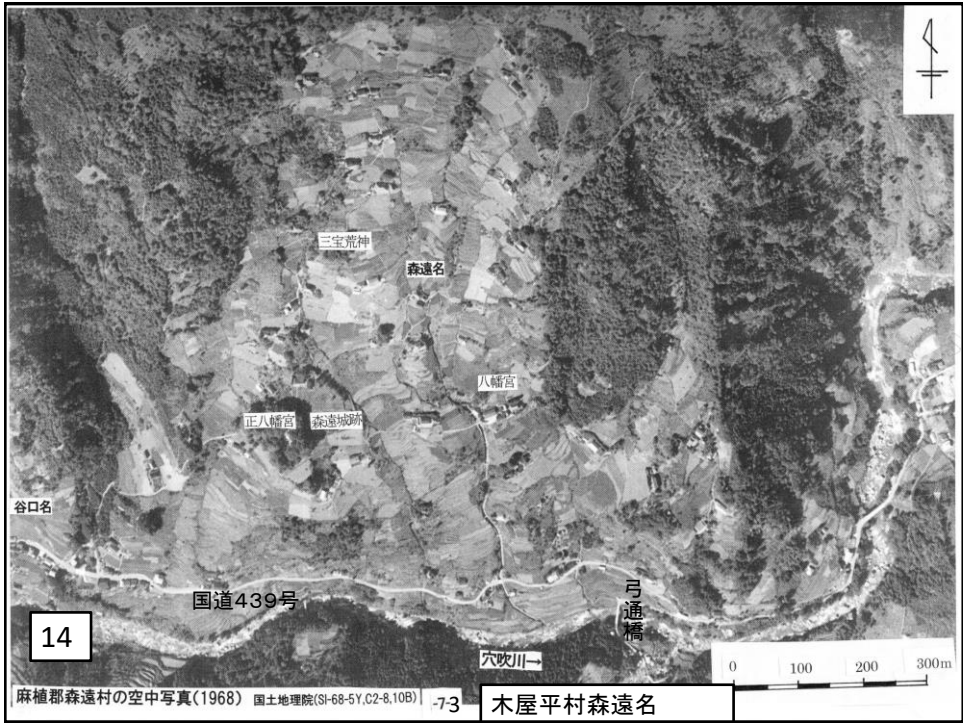
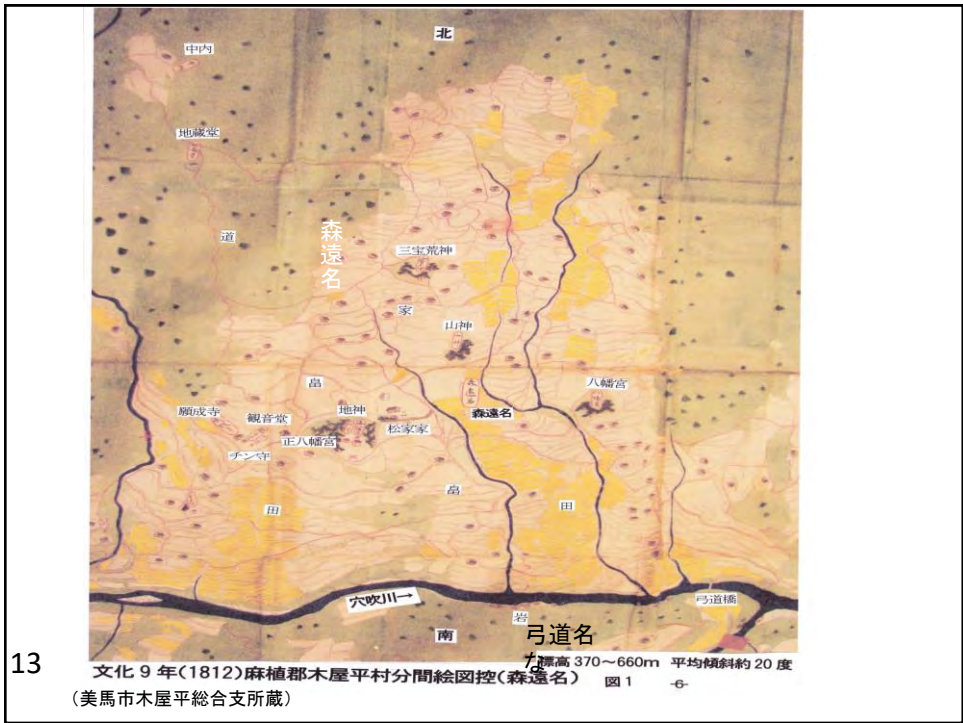
8. 阿波国内の現存分間絵図

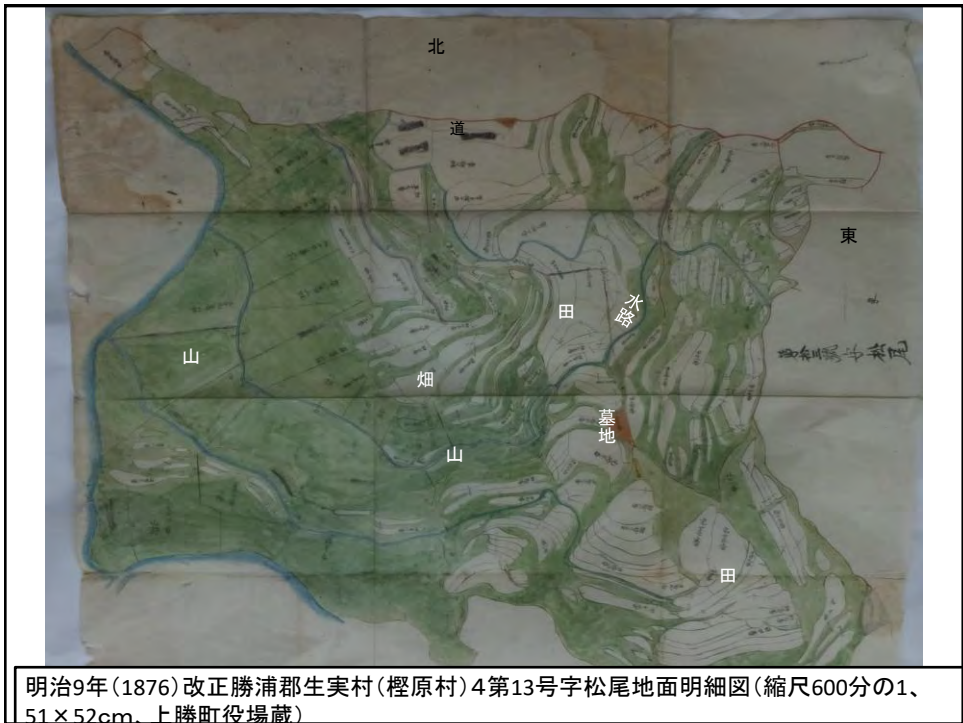
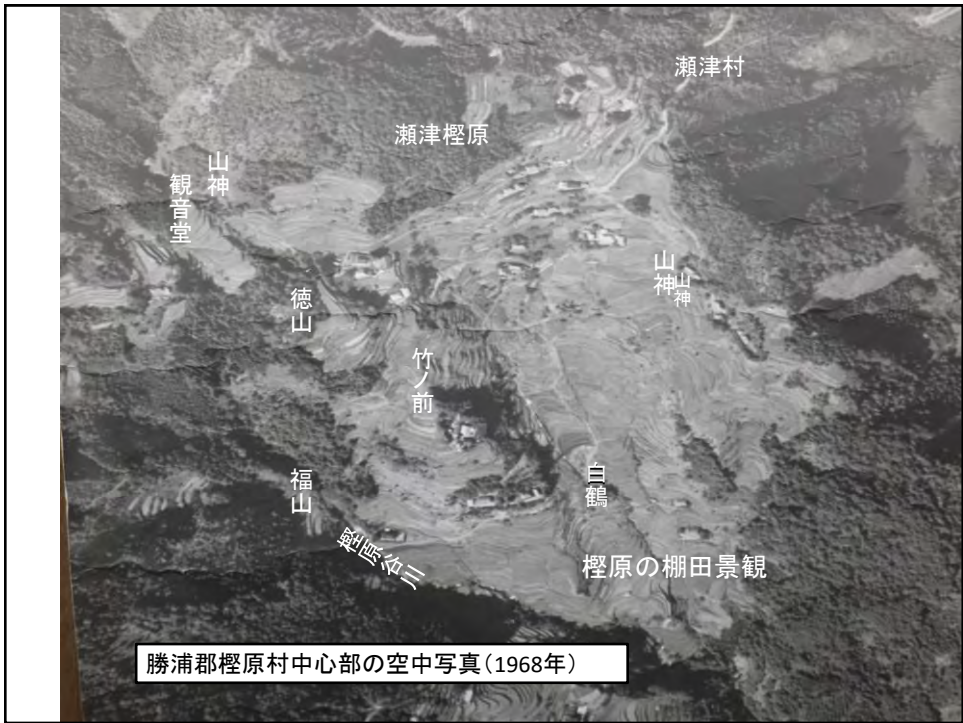
- 1) 分間村絵図(控図・写図・下図): **約72カ村・77点**(阿波国藩政村595ヶ村の12%)
- 2) **作製年紀が記されるのは43点**(55.8%)
- 3) 分間郡図9点(三好郡・海部郡を除く8郡図現存/阿波国10郡)
- 4) 天保2年(1831)阿波国図完成→文政11年(1823)約6点現存(1/90,000)
- 5) 縮尺45,000分の1・明治3年阿波国全図(木版図)
- 6) 分間絵図の作製事業=**文化3年(1806)～文政11年(1828)頃**→5年後に淡路国分間村絵図着手



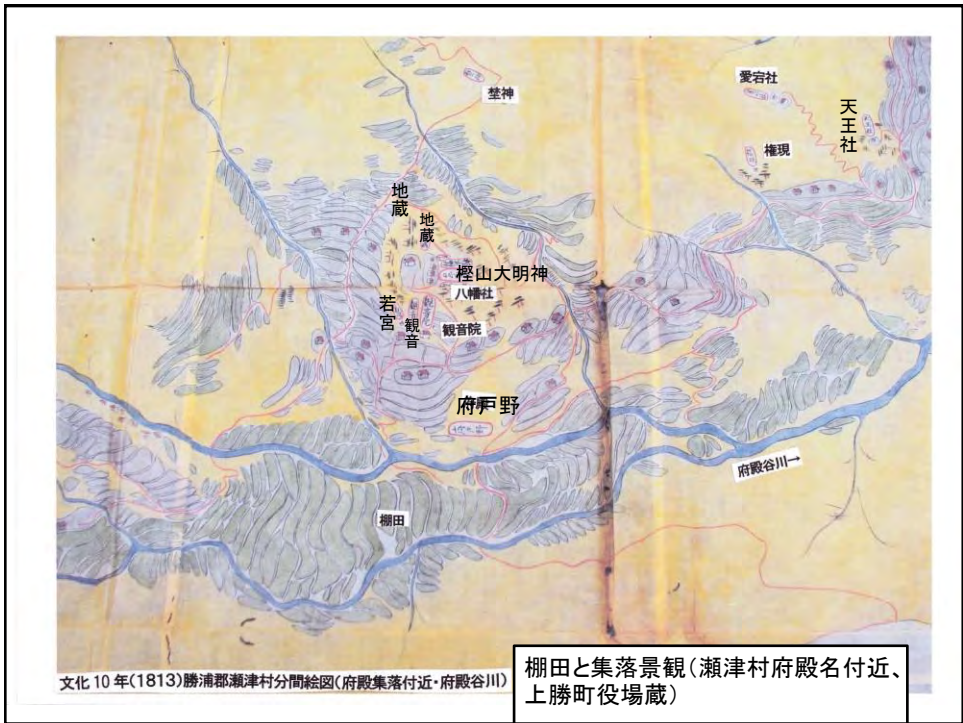
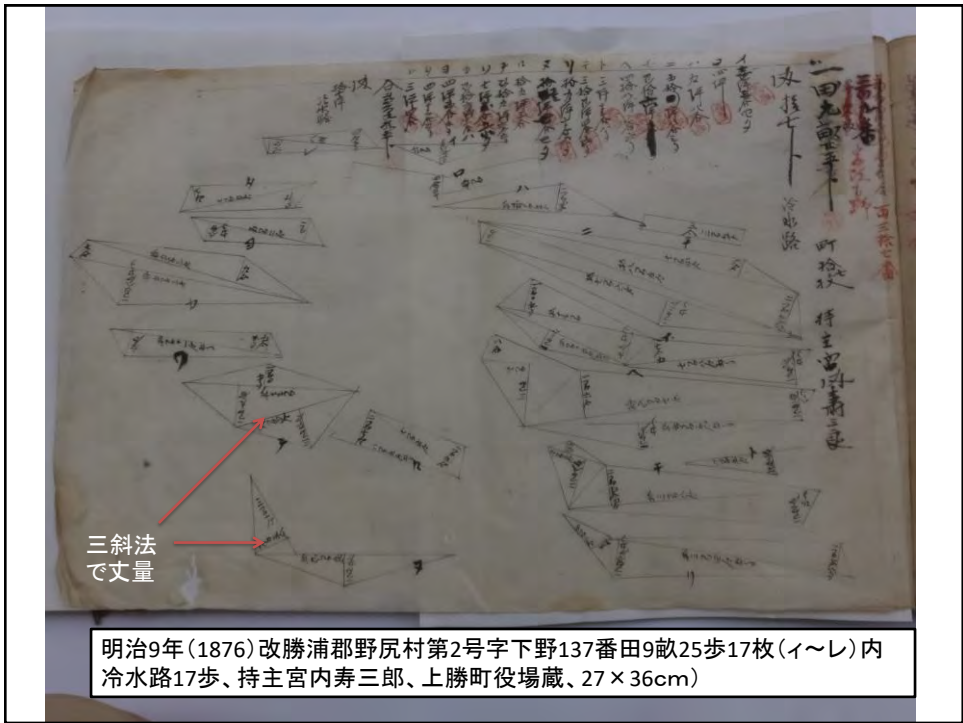


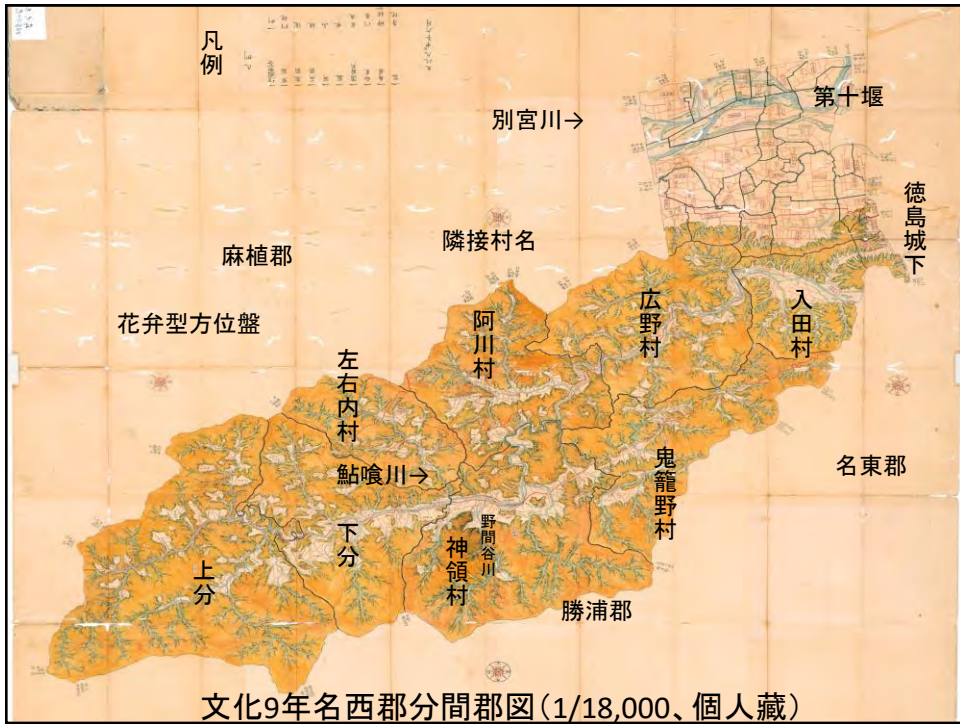




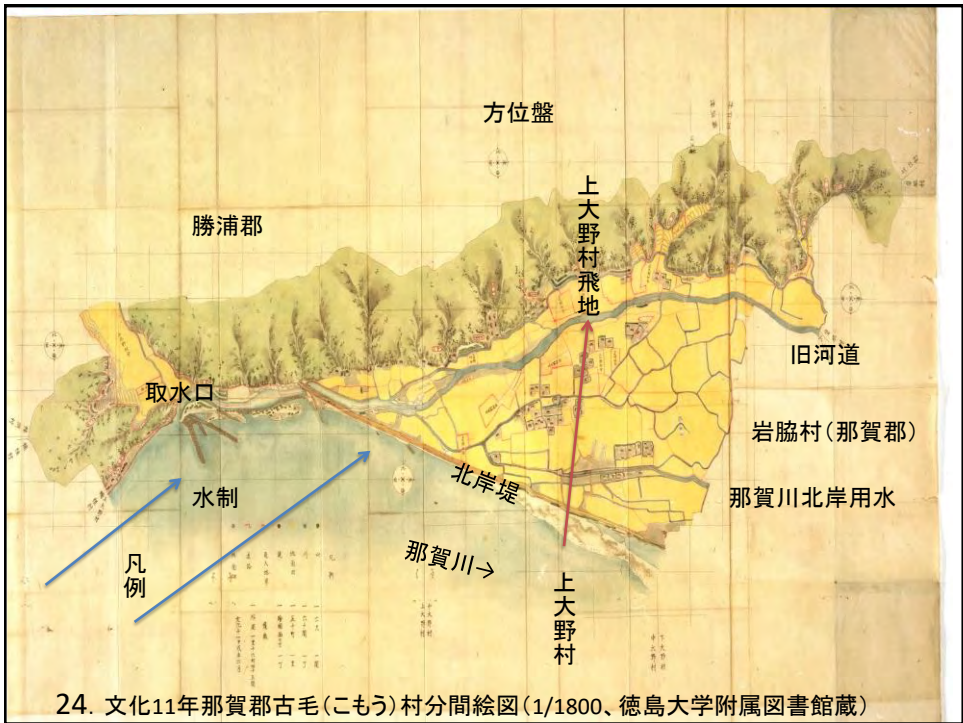












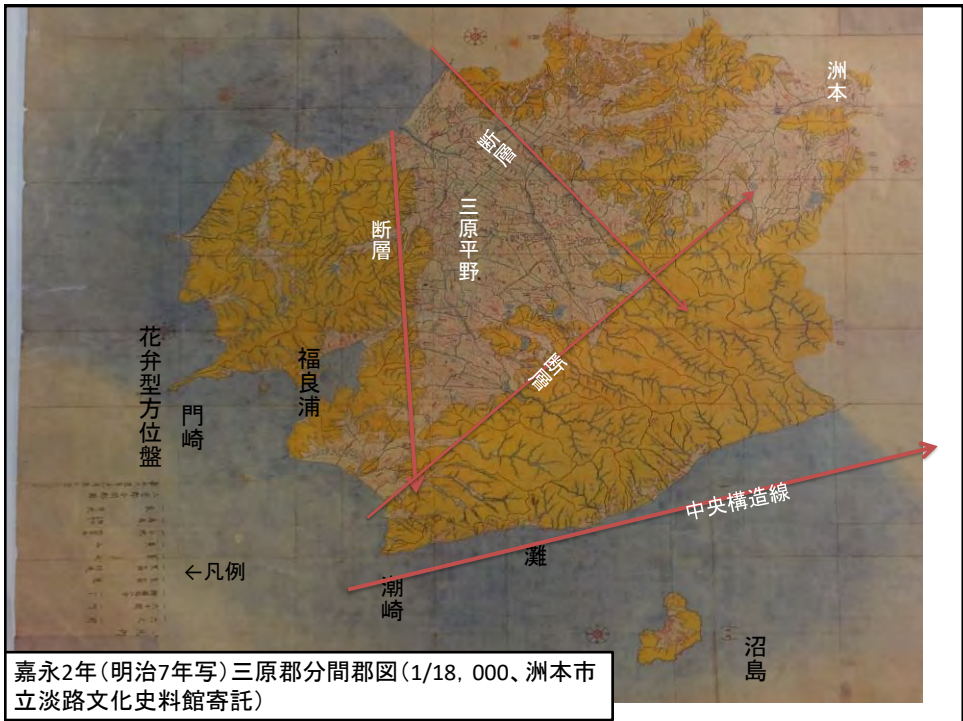


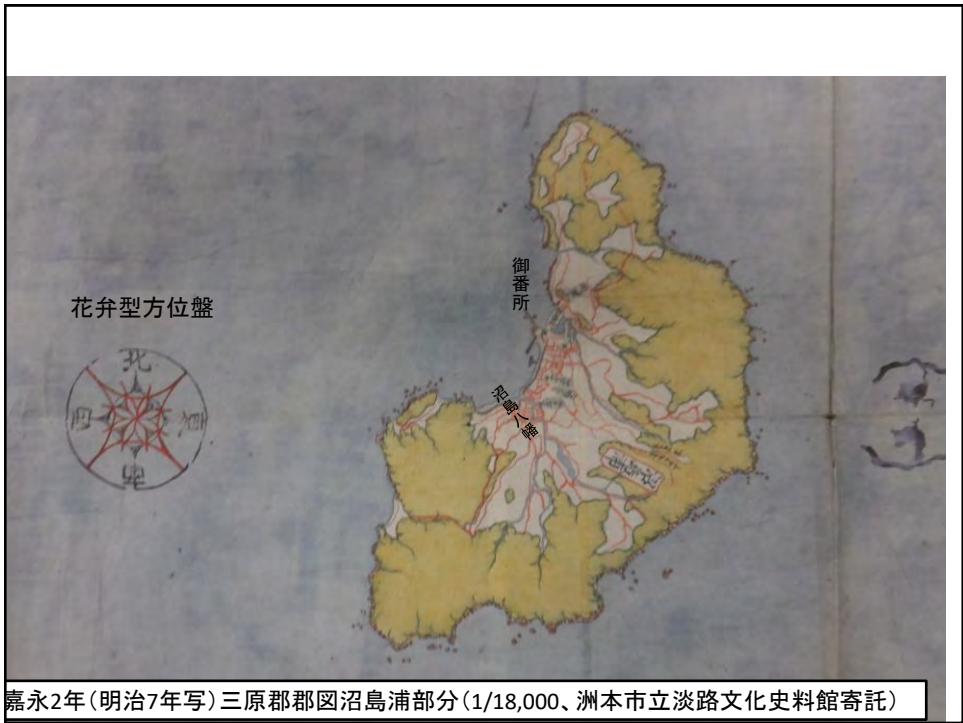


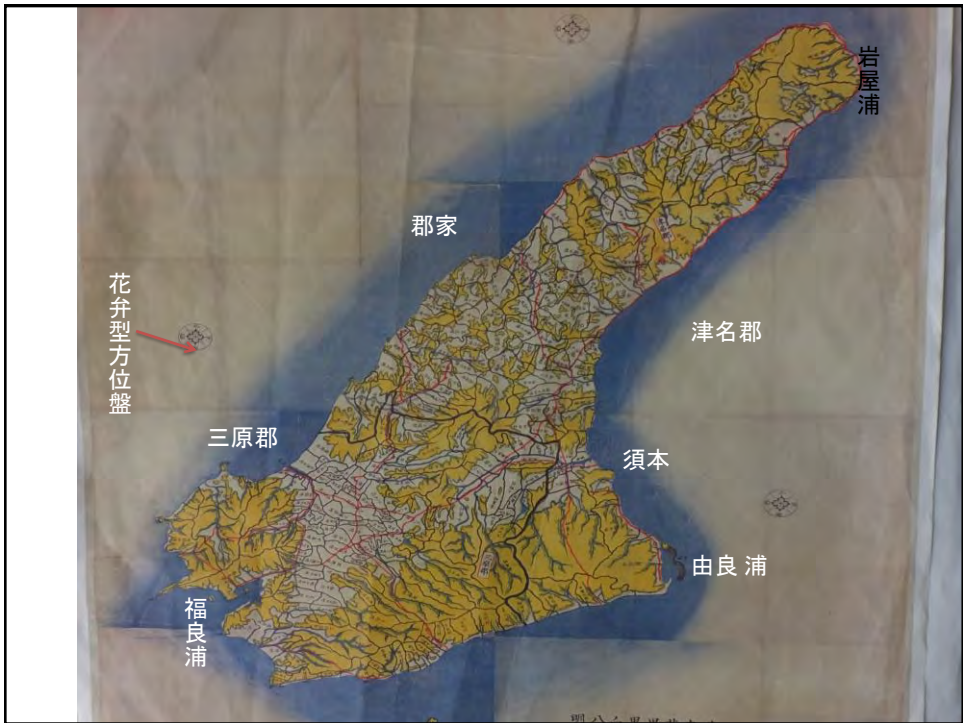
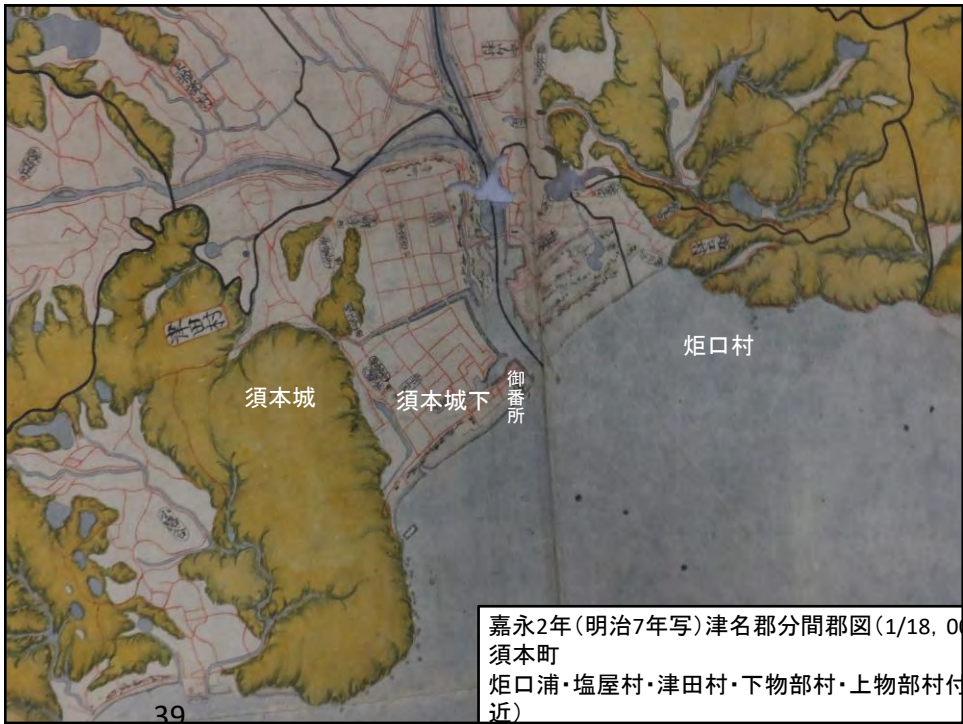
33. 淡路国内の現存分間絵図

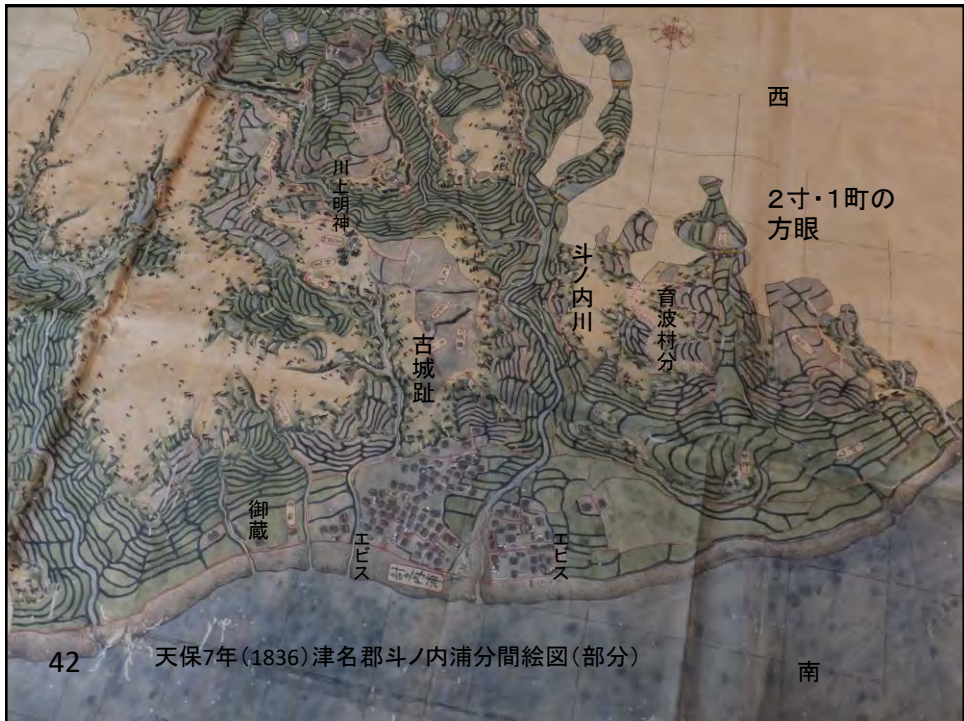
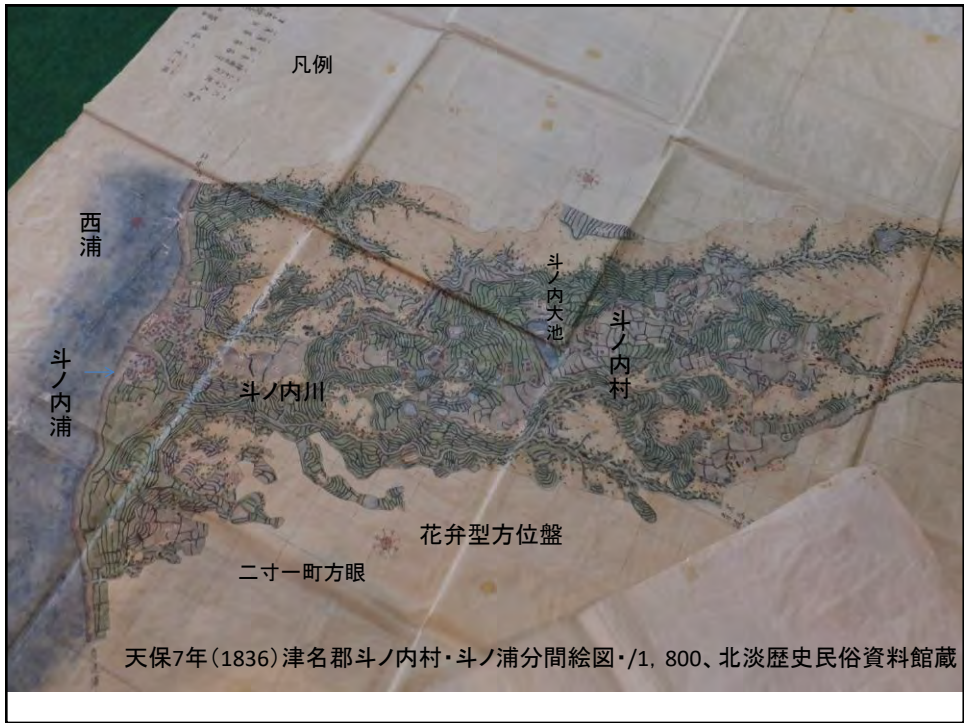
- 1) 現存分間村絵図→68カ村/72点(淡路国藩政村256ヶ村の約27%)
- 2) 津名郡分間村絵図→21カ村/26点
- 3) 三原郡分間村絵図→44カ村/46点
- 4) 淡路国の分間村絵図作製事業は阿波国が終了した文政6年より約5～13年後の文政11年～天保12年
- 5) 淡路国の分間村絵図、全村絵図に控図(凡例)あり、阿波国の場合は控図・写図・下図等である点で異なる
- 6) 阿波国の分間郡図は文化13年にほぼ終了、津名郡・三原郡ともに嘉永2年(明治7年写)、阿波国よりも約20年遅い
- 7) 淡路国図は嘉永2年・明治3年(木版図)の2点で、阿波国の文政11年よりも約20年遅い
- 8) 淡路国と阿波国を比較して表現内容・精度は同じ





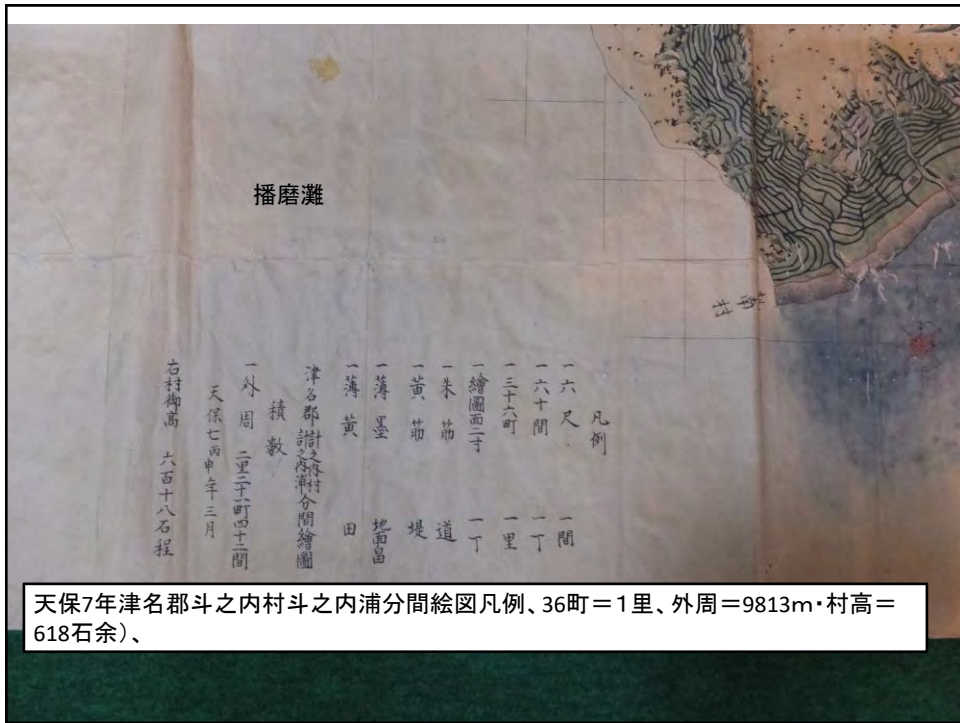






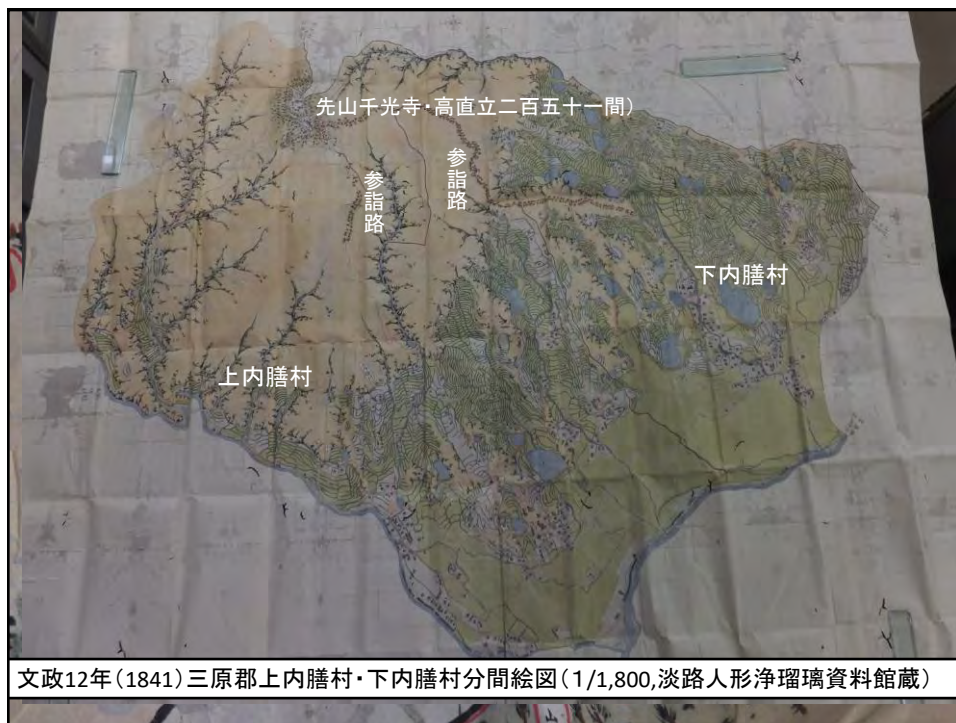


44. 津名郡斗之内村・斗之内浦付近の空中写真(1963年、国土地理院kk-63-5、C6-5)

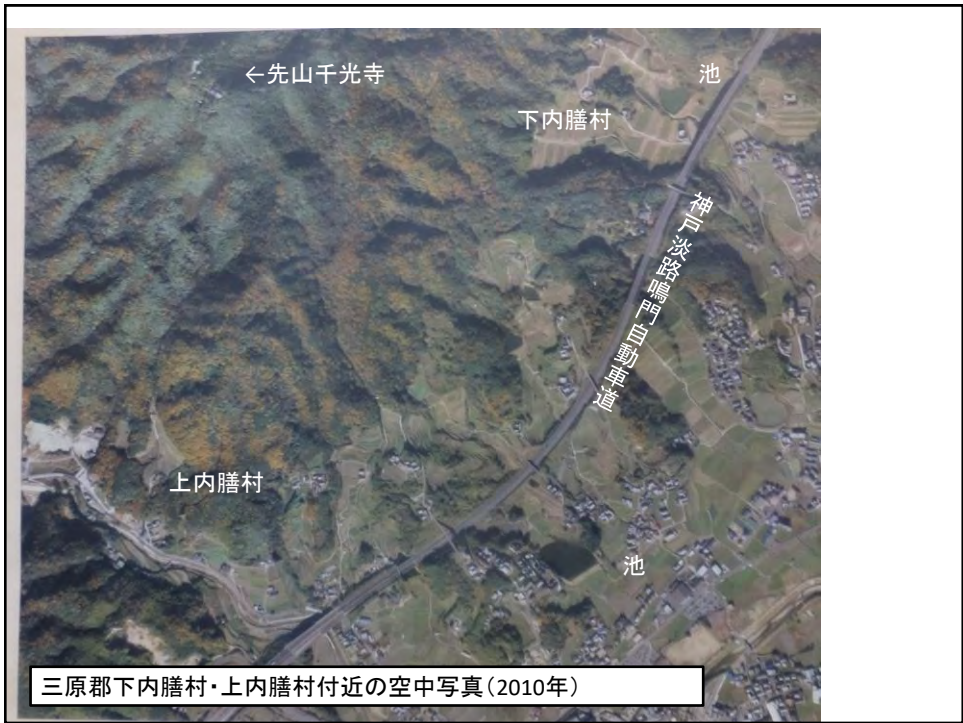


47. 天保7年、斗之内村斗之内浦分間絵図溜池群

- 1) **地形: 津名丘陵→保水力の弱い小河川**
- 2) 斗之内浦→斗之内川・千谷川の扇状地、標高0~10m
- 3) 斗之内村(標高50~220m)→溜池37ヶ所、最大「斗之内大池」
- 4) 斗之内大池→弁財天・明王寺・観音堂・井出口
- 5) 斗之内大池→上手に17ヶ所の溜池群(最高標高250m)
- 6) 斗之内大池上手の棚田の枚数→絵図19枚、空中写真約30枚→絵図の棚田表現に省略あり(急傾斜地)
- 7) 段々畑→絵図17枚、空中写真約19枚
- 8) 淡路島の溜池数(1979)→25, 041ヶ所、水田100haあたり236ヶ所(全国最大)
- 9) 淡路水田面積→**10,610haの約76%が溜池灌漑依存(兵庫県約46%、全国約11%)**



文政12年(1841)三原郡上内膳村・下内膳村分間絵図(1/1,800,淡路人形浄瑠璃資料館蔵)



51. 阿波の測量家・岡崎三蔵の事績・測量術

1) 徳島藩領阿波・淡路の実測に基づく分間絵図作製事業→享和2年(1802)～嘉永2年(1849)頃、藩天文方(絵図方)の岡崎三蔵宜陳(4代)、夫左衛門宜平(5代)。

2) 岡崎家歴代の事績・測量術の記録

①『図解 南阿測地法 一卷～七巻』→稿本、測量術、寛政11～文化9年頃、三蔵宜陳著、個人蔵・徳島城博物館寄託

②『図解 南阿量地法 図附録 全』→徳島県立図書館蔵、呉郷文庫、稿本、絵図仕立法・測量器具等、三蔵宜陳著、享和2年以降と推定、上書の一部収録か『紅

③『紅毛流 規矩元法 図解 下巻』→県立図書館蔵、稿本、宜陳著、根発術図解、文化9年頃

④『岡崎家文書集 全』→日本学士院蔵、稿本、整理番号5819、明治40年手稿・大正11年写

⑤『阿淡御両国絵図面』→徳島県立図書館蔵、呉郷文庫、稿本、明治40年写

岡崎三蔵の研究史

1) 三上義夫(1947)『日本測量術史の研究』→岡崎家文書の一部を疑問視

2) 『徳島県史 第三巻』(1965)

3) 『名東郡史』(1960)

4) 『鳴門市史 中巻』(1982)

5) 川村博忠(1992)『近世絵図と測量術』

6) 佐光昭二(2007)『阿波洋学史の研究』

7) 矢守一彦(1984)「江戸前期測量術史 瑠記」

8) 平井松午(2014)「徳島藩の測量事業と実測分間絵図」『近世測量絵図のGIS分析-その地域的展開』→測量事業の展開過程とGIS分析による精度の高レベルの実証的研究

9) 羽山久男(1993)「徳島藩の分間村絵図・郡図について」、(2010)「勝浦郡榎原の棚田景観と実測分間絵図・地租改正地面明細図について」、(2011)「近世阿波の実測分間村絵図と山村景観」等

10) 羽山久男(2015)『知行絵図と村落空間』古今書院

11) 羽山久男(2019)『徳島藩分間絵図の研究』古今書院

初代岡崎治兵衛祖の事績と徳島藩家老長谷川越前の知遇で徳島に来たとする事績

- 1) 岡崎家の事績を記録『岡崎家文書 全』明治40年9月岡本斯文手稿を大正11年に岡崎家の蔵書を高橋文平筆写
- 2) 『阿淡御両国絵図面』明治40年2月に國 衛筆写
- 3) 明治末～大正期に岡崎家事績を編集
- 4) 『文書』と『絵図面』、岡崎家初代治兵衛祖(元和3～元禄13年)紀州和歌山の人、寛永16年8月5日長崎出立
- 5) 長崎で長崎樋口権右衛門(乾貞)から天文学・文学修業
- 6) 寛永18年3月10日、徳島藩家老の長谷川越前貞雄が樋口権右衛門方同宿し、岡崎治兵衛と相諭
- 7) 『絵図面』、正保2年2月家老長谷川越前の客分として徳島に来たる、高100石で遇さる

家老長谷川越前長崎遊学に対する疑問点(1)

- 1) 長谷川越前(禄高4007石)・2代藩主忠英(ただてる)治世下(寛永15年/1638、6人家老体制)
- 2) 慶長18年(1613)2月～万治3年(1660)5月家老職
- 3) 『阿波藩幹譜』(稿本)の長谷川越前事績、寛永18年(1641)の長崎遊学の記録なし
- 4) 寛永10年(1633)「海部騒動」、越前はその当事者として正保3年6月(1646)までその渦中
- 5) 『藩幹譜』長谷川、正保3年1月12・24日、老中・側御用人・大目付列座、益田豊後長行と対峙し、勝訴
- 6) 『藩幹譜』、長崎に遊学、寛永18年2月15日体調不良、家老職辞し、忠英から「年来、苦身の仰せあり、御刀給わり」

家老長谷川越前長崎遊学にたいする疑問点(2)

- 1)『阿淡路年表秘録』長谷川越前記録→長崎遊学の記載なし
- 2)寛永2年(1635)「淡路須本へ罷越、御普請絵図申付候様被仰付」(『絵図面』)
- 3)寛永13年6月9日「須本絵図御用ニ付絵師召連須本江罷越」(『絵図面』)
- 4)寛永18年2月15日「願之通御政事御免御刀被下」と越前長崎に遊学したとされる寛永18年3月10日の『絵図面』『文書』の内容は極めて不自然(蜂須賀家文書「賞罰帳」に記録なし)
- 4)江戸在府中藩主忠英が国許家老の長谷川越前に宛の書状・蜂須賀家文書「忠英様御代草案」、寛永13～同19年、55通、寛永16年4月13日～11月8日39通、寛永17年正月～11月6通、18年8月27日～7日～19年2月2通、合55通の多数
- 5)寛永～正保期、長谷川越前は忠英を支える重要なブレーンの1人であり、長崎遊学はあり得ない。

岡崎三蔵事績の疑問点(3)

- 1)『絵図面』『文書』、正保2年(1645)2月に長谷川越前の誘いに応じて「阿波江来ル、当分客分トシテ居り候、壹ヶ年御手当トシテ高百石ヲ賜ル」→平井松午(2014)も指摘、禄高4007石の家老越前が岡崎に本藩の高取諸奉行格(高50～100石)相当する100石を与えとする点は大いに疑問。
- 2)『絵図面』、岡崎家の徳島藩に対する測量術伝授の功績、「五人扶持方御支配十三石」の無足(4代三蔵宜陳)「賞罰帳」になし
- 3)『絵図面』に「御手当、二季に銀札六貫目宛、筆墨絵具料一ヶ月手当ハ六百目宛」、諸手当加正米3百43石、年正米に当時の換算、宛高の3分の1の114石、岡崎、不満

56. 蜂須賀家文書「賞罰帳」にみる岡崎三蔵事績の疑問点(4)

- 1)『絵図面』『文書』寛政9年(1796)8月15日、無足藩士取立、「阿波国御絵図御用被仰付」の事績、「賞罰帳」になし
- 2)「賞罰帳、寛政四～文化十二年」岡崎の記載なし
- 3)「御國賞罰御帳、寛政四～文化六年」同上なし
- 4)『文書』文化8年(1811)8月15日、御山下絵の完成「蜂須賀侯ヨリ黒羽二重御召御紋付及ビ御羽織共御結構ヲ賜ハリタリ」(「賞罰帳」になし)
- 5)「蜂須賀様、西ノ丸御馬場ニテ御見分ニ相成り、其際直々高百石ヲ賜ハリタリ」の事績は「賞罰帳」になし、
- 6)「賞罰帳」文化元年(1804)2月11日「御番人、岡崎富左衛門、小奉行格ニ御取立三人扶持方御支配七石被下置御目付被仰付」岡崎と別人物(番方の無足、岡崎は役方の無足)

57. 岡崎家系譜の疑問(5)

- 1)無足の岡崎家の初出、「文政十一年、徳島分無足以下分限帳」(『徳島藩職制取調書抜 下』)の「本々支配御番人」(133人)→「御番人」無足の番役で岡崎ではない
- 2)『家臣成立書并系図』2家の岡崎家あるが、岡崎源右衛門(7代)=禄高80石・西ノ丸御番役、岡崎富左衛門、
- 3)寛政5年(1793)、6代民十郎(禄高80石、御広間加番)は富田で屋敷9畝余を拝領、岡崎夫左衛門宜平とは別人物
- 4)平井(2014)天保14年(1843)岡崎富左衛門が無足から小奉行格に昇進した可能性があり、この人物が岡崎家5代夫左衛門宜平に相当すると推定が、『徳島藩士譜』ではこの富左衛門の初代・富左衛門、文化4年(1804)に御作事手代から奥目付役(無足)に昇進しており、4代小半太は明治2年(1869)に富田屋敷日帳役(無足)を拝命していることから、岡崎夫左衛門とは別人物と考えられる

『図解 南阿測地法 七巻』にみる岡崎家の測量術

○岡崎家の測量術書

- ①『図解 南阿量地法 全』(稿本、徳島県立図書館蔵、呉郷文庫)→享和2年(1802)以後の著作
- ②『紅毛流 規矩元法 図解 下巻』(稿本、徳島県立図書館蔵、呉郷文庫)→文化9年(1812)頃
- ③『図解 南阿測地法 一卷～七巻』(稿本、個人蔵、徳島市立博物館寄託)→寛政11年(1799)秋頃(完本で残る)

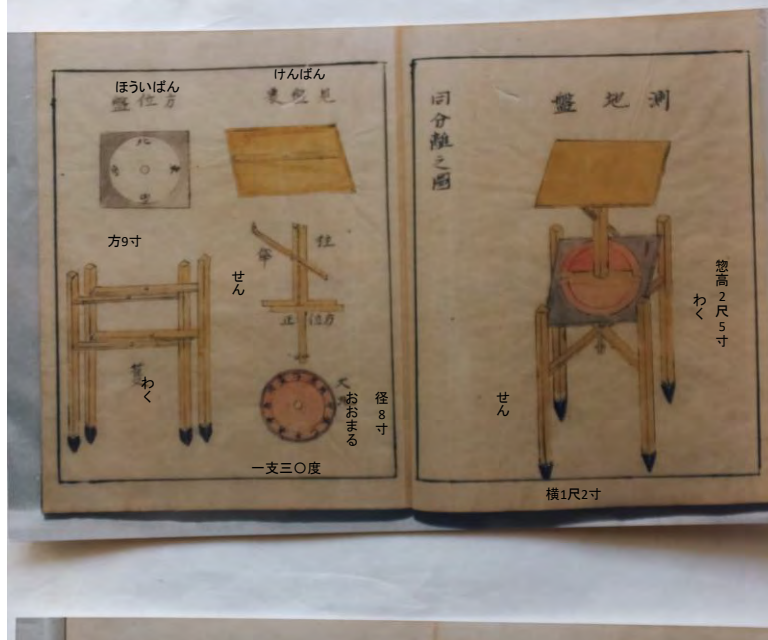
59.『南阿測地法 巻一～巻七』(個人蔵)



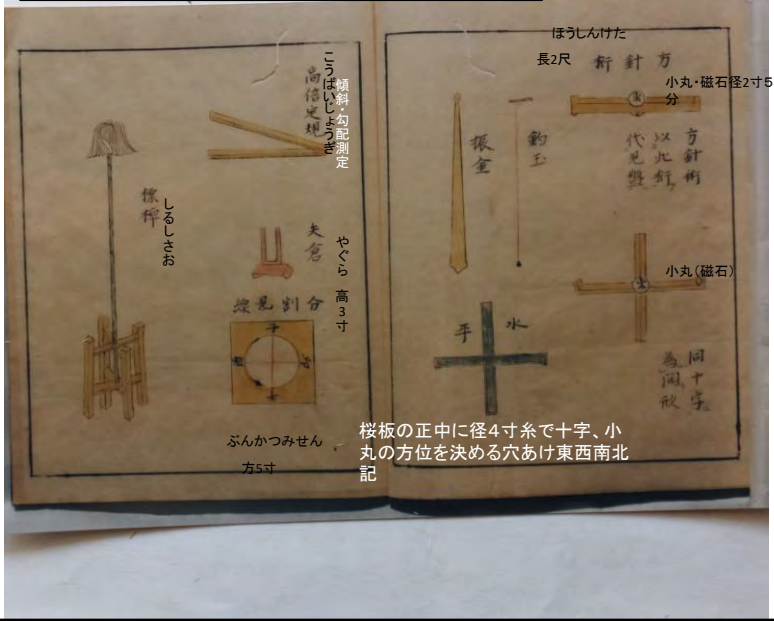
60. 『南阿測地法 七卷』の構成

- 1) 七巻合 = 243条
- 2) 『巻之一』(三格) → 三格・八式・目録・機器
- 3) 『巻之二』(42条) → 見盤術
- 4) 『巻之三』(38条) → 方針術
- 5) 『巻之四』(32条) → 根発術
- 6) 『巻之五』(46条) → 武器町見(鉄炮・矢)
- 7) 『巻之六』(31条) → 民間町見
- 8) 『巻之七』(54条) → 国図用法(絵図仕立法)

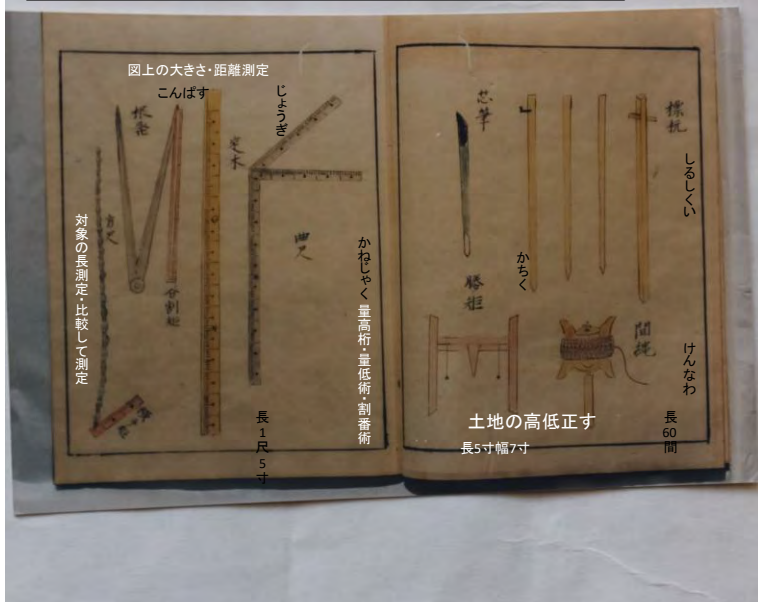
61. 『南阿測地法 巻一』(測量器具1)



62『南阿測地法 卷一』(測量器具2)



63『南阿測地法 卷一』(測量器具3)



64『南阿測地法 卷五』(測量器具4)

一 鉄砲盤 此盤ニ面ヲ用ルルハ業程捷ナリ用一
向ニ此盤ヲ置キ場ニテハ用盤座研改ニ業中盤ノ法
アリト可也

一 盤仕立 盤高ニ尺三寸ヨリ五寸位迄ヲ用テ其人
ノ好ニ應スヘシ 樽板厚六七分長ク一尺五寸
幅又四方表有縁縁高ク一寸盤ノ裏裏中ニ六七
寸角ニ開ニテ付添置カ亦チヤン盤ニ是ハ水
ヲ入長ハ徑ノ濃ナル様ニ可也是盤ノ手正ラ正
ス水ヲ入ル、為ナリ

右一尺五寸ノ盤ヲ五寸降キ如圖ニ引残リ方
一尺ト成ル是圓至一尺ノ平田ヲ廻シ方田ノ取
リ規ス飯リニ各行テ方田地方ノ家トス從心

向鏡
標桿
印柱
割盤櫃

麻糸一間ニ七印・長さ60間

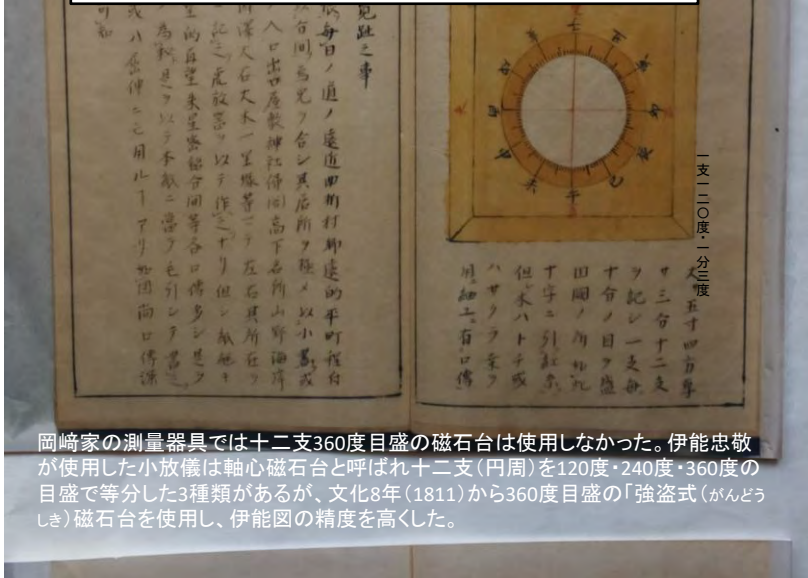
65『南阿測地法 卷五』(測量器具・鉄砲盤)

てっぽうばん・
戦場における望敵
盤 炮 鉄

盤
望
指
標
鉄
砲
盤
天
窓
鏡
日
月
鏡

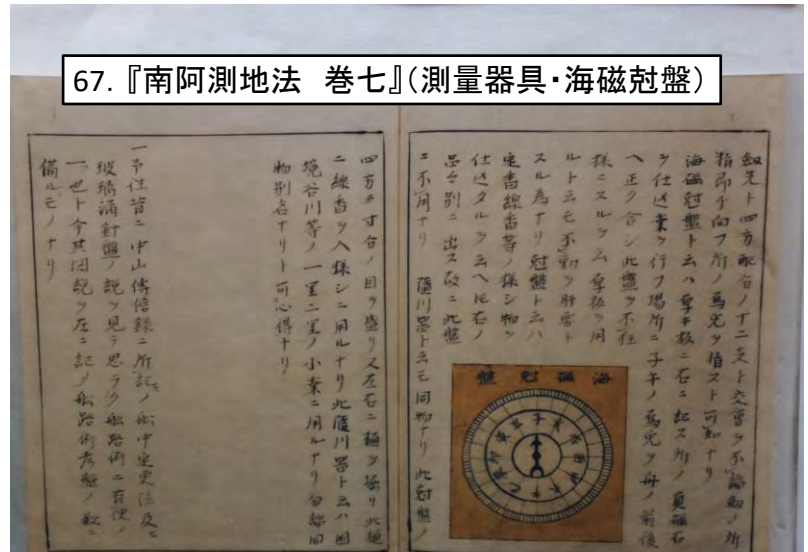
得武術ノ士其器ニ就テ望敵ノ事ヲモテ修レ置ハ
於戰場ニ相テラシト今淺見社撰テ不敬鉄砲ノ
町見弓ノ町見鏡ノ町見若干條ヲ因解シ於ニ是
術ノ器ヲ記ス學者平常修レ得テ望敵地其職分
ノ以武器用テ達スル至ラハ平口微意ヲ撰メテ
ルヘシ

66. 『南阿測地法 卷七』(測量器具・虎放器)



岡崎家の測量器具では十二支360度目盛の磁石台は使用しなかった。伊能忠敬が使用した小放儀は軸心磁石台と呼ばれ十二支(円周)を120度・240度・360度の目盛で等分した3種類があるが、文化8年(1811)から360度目盛の「強盜式(がんだうじき)磁石台を使用し、伊能図の精度を高くした。

67. 『南阿測地法 卷七』(測量器具・海磁剋盤)



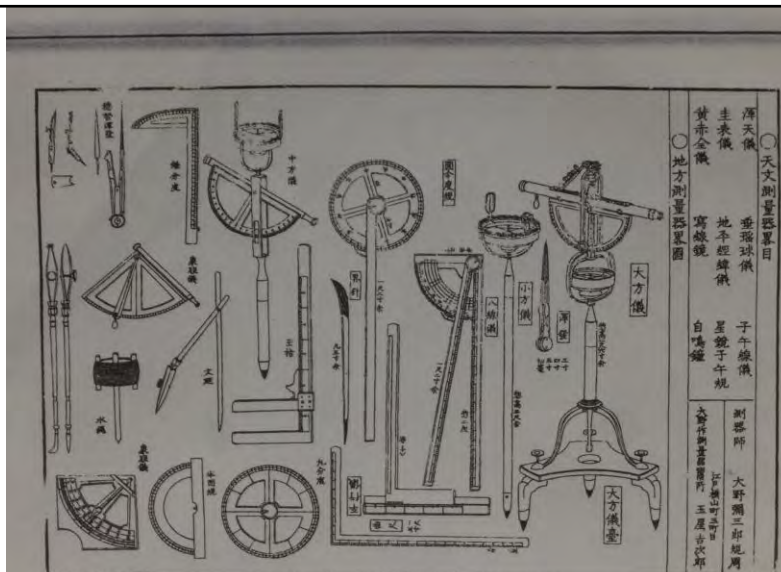
方4寸厚3分、十二支を等分した一支30度を10分の目盛り刻む3度最少、甲斐『駒藏『量地図説』(嘉永5年)、村井昌弘『量地指南 後編』(寛政9年)とも、一支30度 一分3度とてい

伊能忠敬が使用した小丸磁石と同じ

68. 『南阿測地法 卷七』(測量器具・線香台・定香盤)

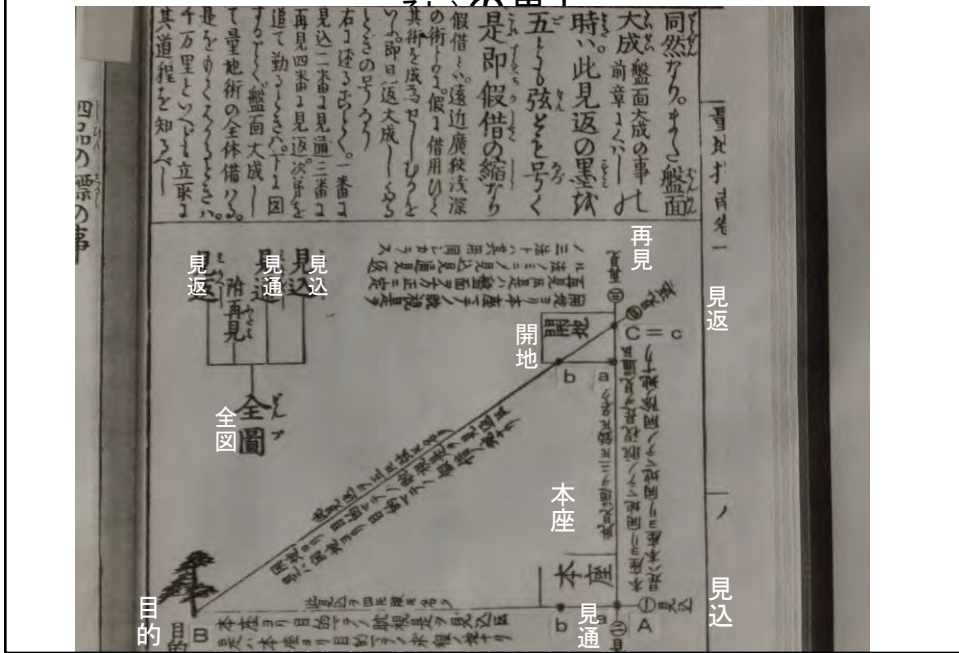


69. 甲斐駒蔵編『量地図説 下巻』の測量器具

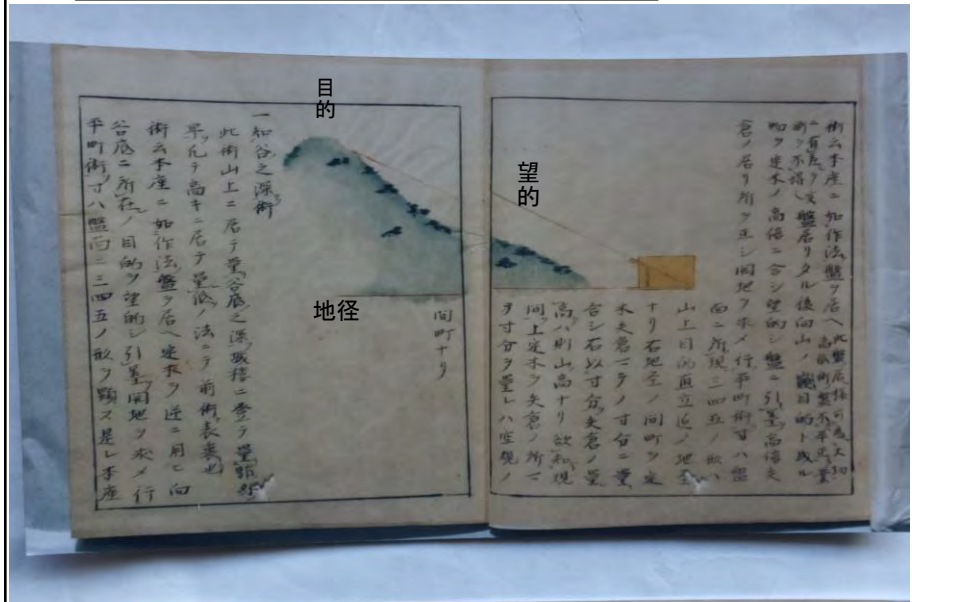


上図は十二支120度、一支30度、1分3度の目盛である。岡崎家には天保期に測量斑の一員であつた森清介(天明3~文久3年)が使用した小放儀と象限儀・根笈等が伝存するが、十二支120度、一支30度である。

70. 村井昌弘『量地指南 卷一』「四品(しひん)の標(し



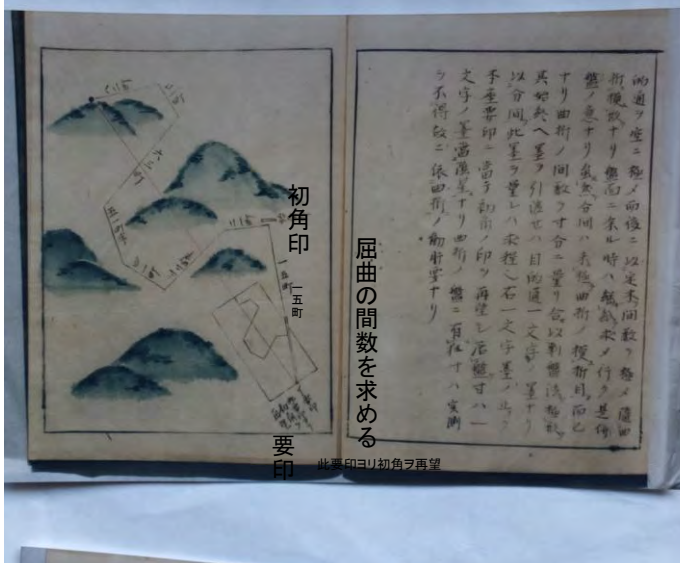
71. 「南阿測地法 卷二」『知山之高術』



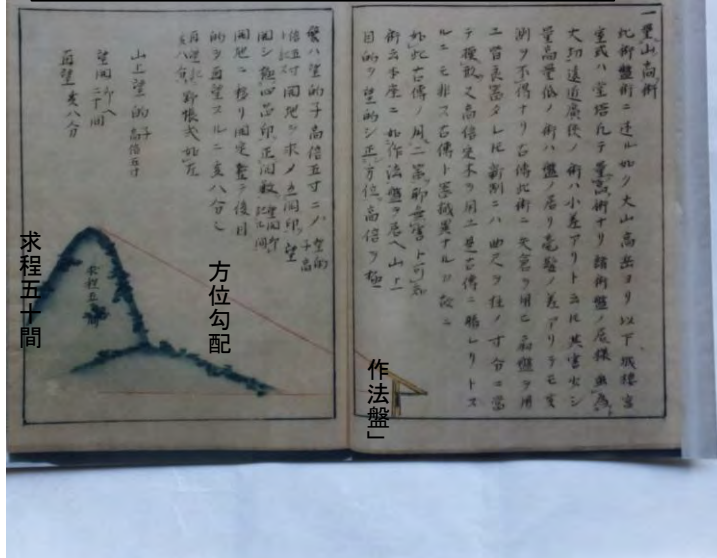
76. 『南阿測地法 卷二』 「三重開術」



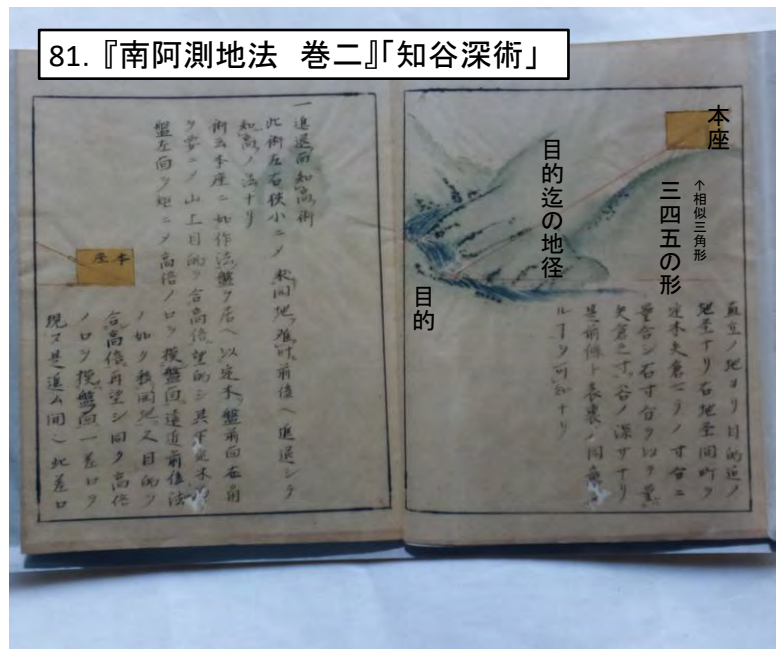
77. 『南阿測地法 卷三』 「陰ノ目的廻節ノ術」



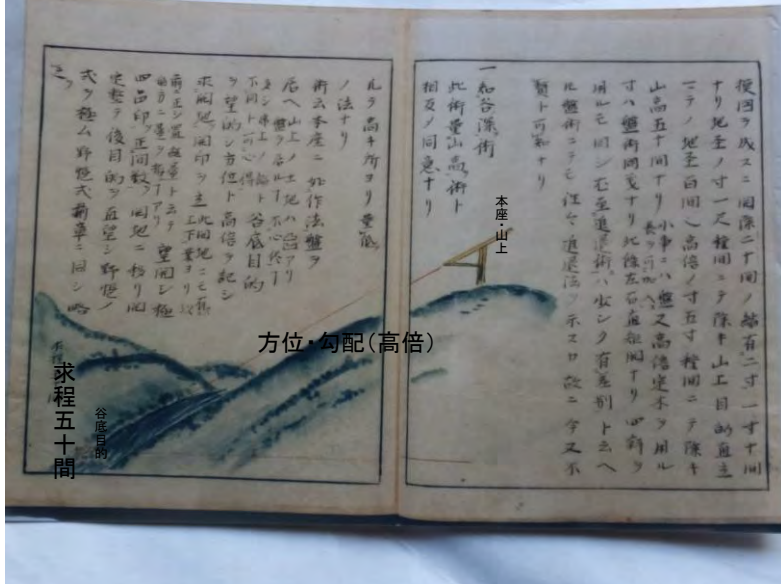
80. 『南阿測地法 卷三』「量山ノ高術」



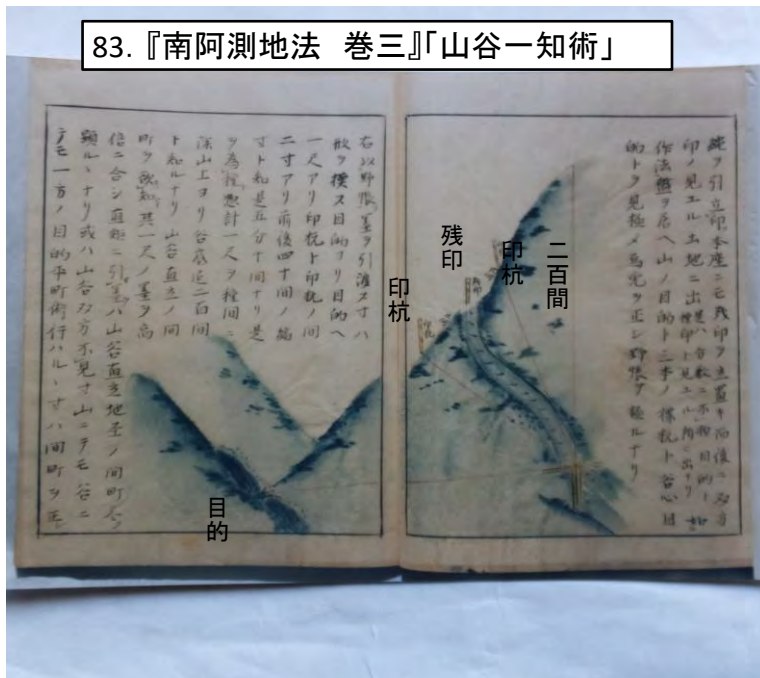
81. 『南阿測地法 卷二』「知谷深術」



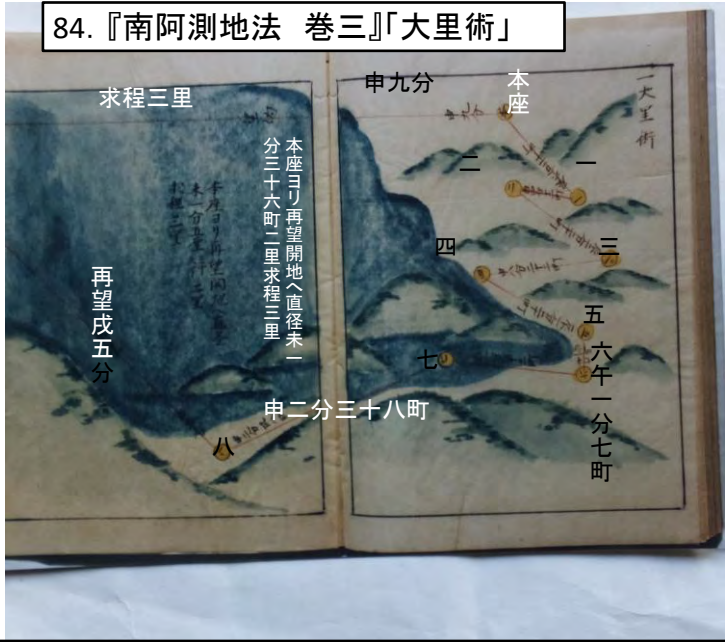
82. 『南阿測地法 卷三』 「知谷深術」



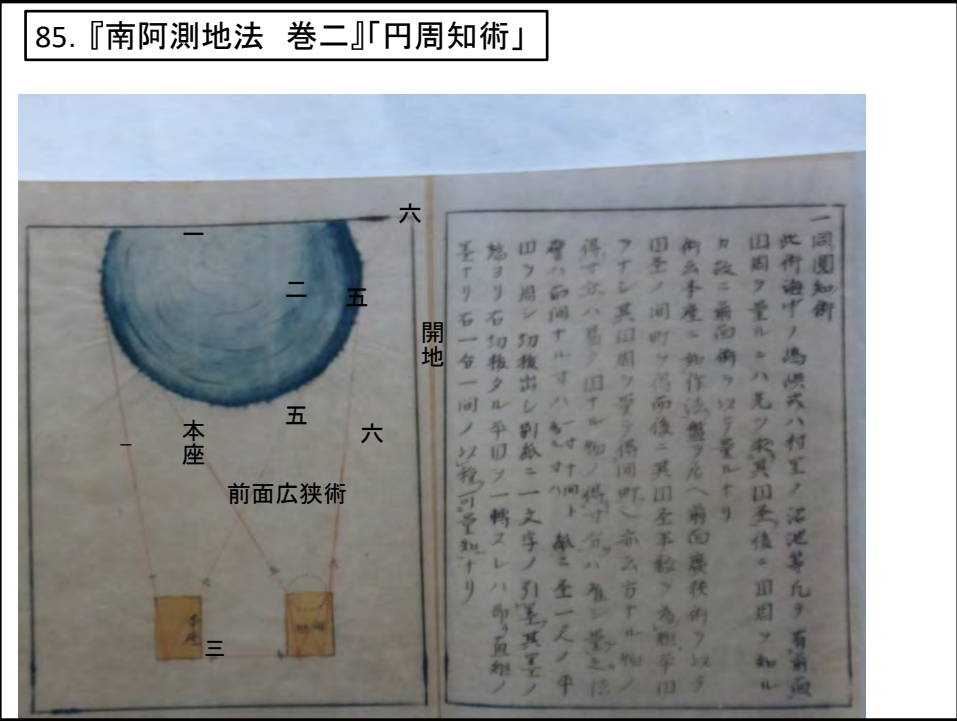
83. 『南阿測地法 卷三』 「山谷一知術」



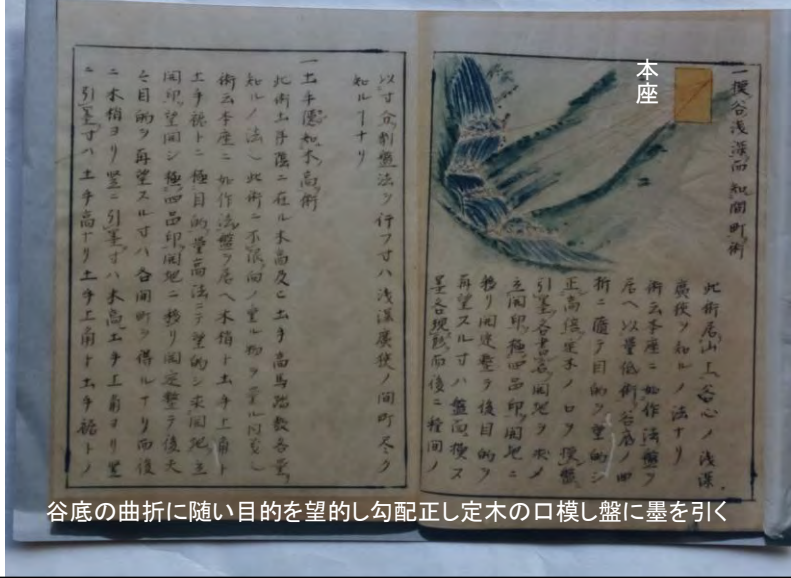
84. 『南阿測地法 卷三』「大里術」



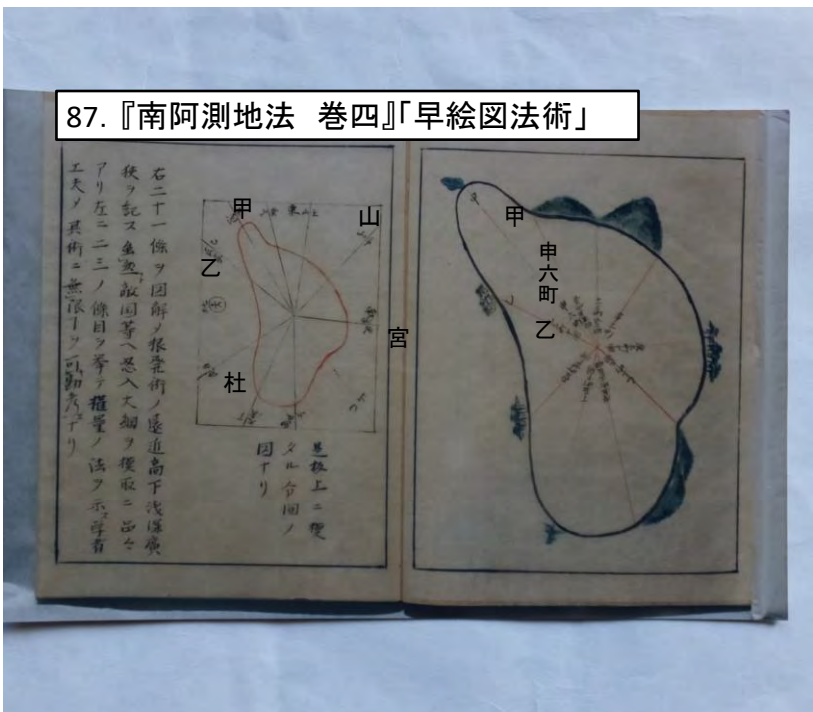
85. 『南阿測地法 卷二』「円周知術」



86. 『南阿測地法 卷二』 「谷ノ浅深ヲ模町間之術」



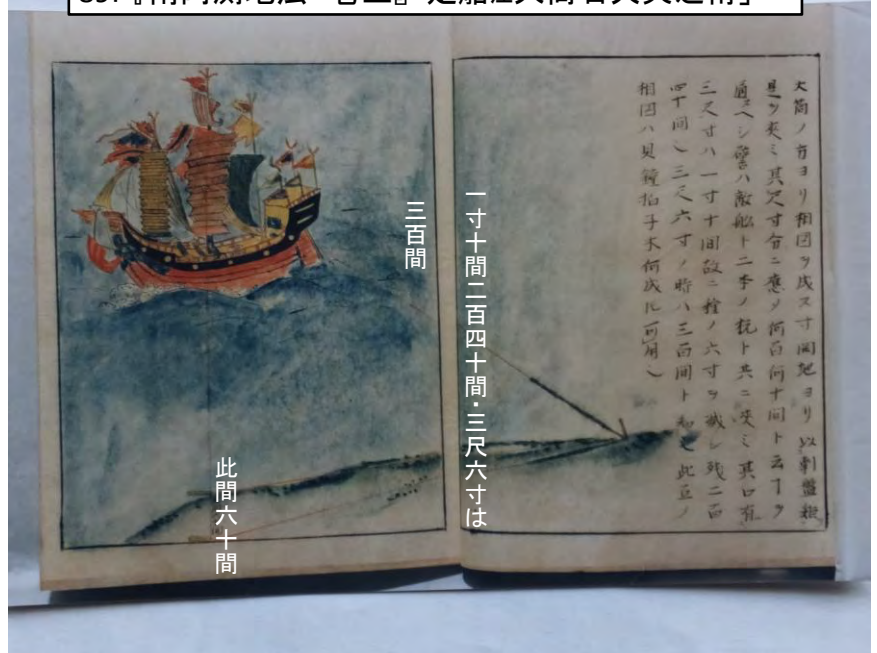
87. 『南阿測地法 卷四』 「早絵図法術」



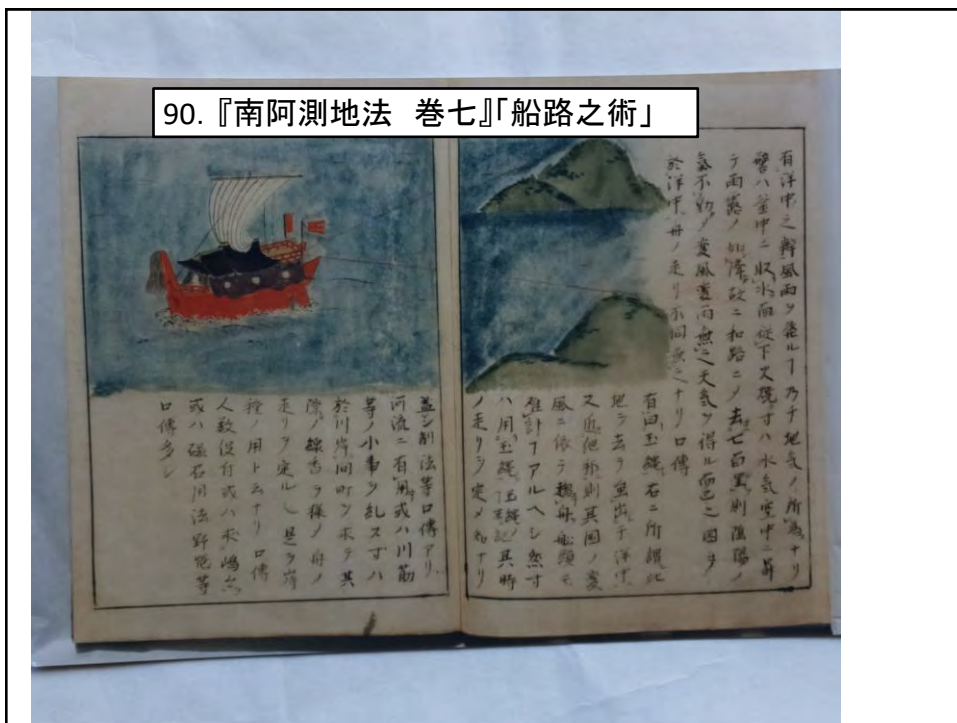
88. 『南阿測地法 卷三』 「早絵図之術」



89. 『南阿測地法 卷五』 「走船江大筒石火矢之術」



90. 『南阿測地法 卷七』 「船路之術」



91. 徳島藩と他藩の絵図仕立て法

- 1) 寛政11年『南阿測地法 卷七』の「国図用法」
- 2) 『図解 南阿量地法 国図附録 全』
- 3) 越中・石黒信由、享和2年『測遠要術 五卷』、文化9年『御検地領絵図仕立法』
- 4) 五十嵐孫作、享和2年『領絵図仕立之事』
- 5) 清水流伝書、享和2年『清水流規矩術町間 秋 国図枢要』
- 6) 渡辺慎述編『伊能東先生流量地伝習録』

92. 村触と絵図御用指出帳

1)『測地法 七巻』「村触之事」

2)『南阿量地法 仕立之法』

→岡崎家より沿道の庄屋五人組・伝馬才判方へ書面を送付→郡代よりの布達(享和2~文化5年頃)「此度岡崎三蔵義御国御用として何郡村へ罷り越し候申し聞え次第役人共罷り出で、人夫仕立その余諸事差し支えざる様、達すべき候なり」と郡代名で村役人共に命じている。

93. 現存する「絵図御用指出帳」

1)「板野郡笹木野村絵図為御用被仰付諸品指出帳控」(春日神社文書)

2)「文化五巳年四月 名東郡芝原村御高田畑町数神社佛閣寺院人家数村境旧蹟相記奉指上帳」(『徴古雑抄続編附録』所収、芝原村以下19ヶ村)

3)「文化十四丑年八月 御国絵図御用二付海部郡塩深村田畠反高其餘共相調帳」(徳島県立文書館蔵岡部文書)

4)「那賀郡陰谷村五人組忠兵衛指出帳」(徳島県立文書館蔵)

94. おわりに(1)

- 1) 徳島藩実測分間村絵図・郡図・国図作製事業に関する藩政文書・記録等ほとんど現存せず
- 2) 岡崎家の事績→明治末・大正期筆写→内容に疑問点多し
- 3) 岡崎家初代治兵衛頭祖(紀州和歌山)→長崎、樋口権右衛門から天文学→正保2年(1645)2月、長崎遊学の徳島藩家老長谷川越前の誘いで徳島へ大いに疑問(越前の長崎遊学の記録「草案」「藩幹譜」になし)
- 4) 初代岡崎治兵衛→誰の誘いで徳島に来たかは不明
- 5) 岡崎家事績→4代三蔵宜陳、藩の無足「五人扶持支配十三石」取立(『絵図面』)→藩の記録「賞罰帳」に記載なし
- 6) 岡崎三蔵の測量法(『南阿測地法』)→定説=清水流規矩術の流+村井昌弘(樋口系)『量地指南』(前編は享和期に刊行)の影響が強いと考える

95. おわりに(2)

- 7) 実測絵図作製過程=実測分間村絵図→編集=分間郡図→編集国図のプロセス(徳島藩のみ)
- 8) 分間絵図の作製目的→行政基本図、村・郡境の確定、図域の内部を測量、飛地・論所の明示→他藩のような地方改革の一環としての絵図作製という政治目的は薄い
- 9) 資料的意義→精密な地形区分表現(山麓線・海岸線・山地・平地・ラグーン)=平面的、土地利用区分=田畑・池・堤・荒地・採草地・新田、微細な村落景観、主要なランドマーク→藩政村・郡・国の空間構造の精密な復原可能
- 10) 分間村絵図と検地絵図・地方文書(検地帳・拝知水帳)等との1筆クラスの摺り合→村落の社会構造の復原可能
- 10) 近世後期の先進藩の実測絵図と比較しても精度・精緻度は高い→近代実測地図のさきがけとしての意義大